

2024年度
戦争体験＋プラス

わたし せん そう たい けん き 私の戦争体験記

富田林市 ふる ひら み よ こ
古平 美代子 90歳

私は昭和8年旧満州の大連で生まれました。父の転勤で14年青島に移り（余談ですが2学年上にピアニストの中村八代さんがおられたそうです）青島は本当に綺麗な街だったように記憶しています。

敗戦とともに日本人は、外に出歩くことも危険だと言われ、八路军が家の塀の上を銃を手に中腰で通る姿を、私達家族は暗闇の中、身を伏せ息を殺して見ました（両親、姉、兄、私、弟2人）。

2日後、夜半に家を出た時に、もし迷子になったら大きな声で合言葉を言うように姉から言われ、私は下の弟（当時6歳）の手を引き、小走りに父の知人の家まで急ぎました。

それから大勢の日本人とともに最寄りの駅から無蓋車に乗り、何日時が過ぎたか分かりませんが、ただ、人が歩くくらいの速さで動いていたので、元気な人は飛び降りて、支那人（中国人）の店先にぶら下がっている鶏の丸焼きを抱え込み、それを食べながら天津の収容所にたどり着きました。



収容所内は大きな建物がいくつもあり、1つの建物に100人くらい雑魚寝で、週1回元気な人がトラックで食料の買い出しに塀の外に出るので、兄はいつも希望して出ていました。何を食べていたのかは覚えておりません。

引き揚げるときは1人千円しか持ち帰れないと聞いていたので、お金がたくさん捨ててあり、捨てる人もいなかったと思います。奥の棟には軍人さんが入っていて、私たち子どもが遊びに行くと、とても喜んでくれました。カレンダーがないので収容所にどれくらいの間いたのか分かりませんが、終戦から逆算して、2か月くらいいたのかなと思います。

いよいよ引き揚げることとなり、米兵2人立ち合いのもとに、リュックの中の物を全て出し（家族単位で台の上にも、もし違反したら乗せないと言われました（貴金属、お金、写真は違反）。でも誰が持ち帰ったのか、昭和16年に家族全員で写った写真が1枚あります。

乗ったのが軍艦なので、くさりの手すりは子どもには持ちにくくて、大変な思いで上まで行き、船底まで降り、12月の寒い中体を寄せ合って耐えたと思います。

夜中に弟がオシッコと言っているので甲板に上がると、大きなアメリカ兵が何人も銃を持って立っているのが恐怖で本当に殺されるかと思いました。少し前までは学校で憎き米英撃たねばならぬと教えられていたからです。

私にとっては初めて日本の土を踏んだのですが、帰国後もっと危険な体験をした人が大勢いることを知り、また内地においても戦時中家を焼かれ両親が死に、小さい子どもだけが残された映像を見て本当に泣きました。

今、ほとんどが戦後世代になりました。世界情勢はいつ変わるかわからない、少しでも長く平和が続くことを願っています。

戦後の楽しみは、映画を観る事で、池部良の青い山脈や、阪妻の時代劇等でしたが、その前に必ずニュース番組を映し、先に書いた様な戦争孤児や戦後の焼野原を映していました。

戦争の体験

河内長野市 山澤 峰子 89歳

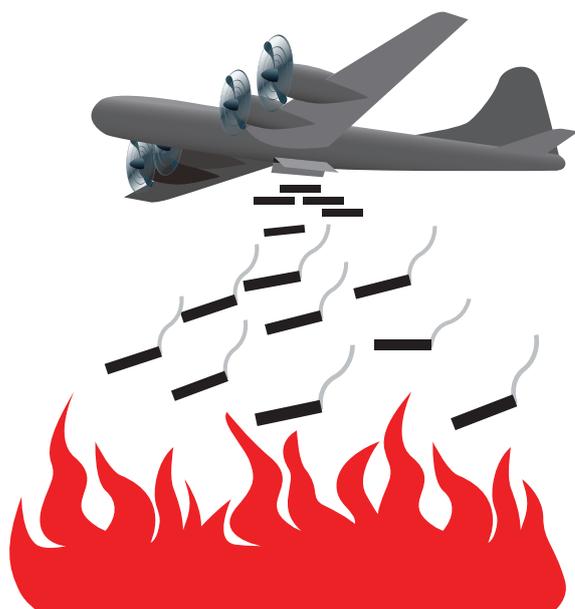
私が小学校に入学するとき、小学校から国民学校になっていました。

1年生の国語の教科書も、サイタ、サイタ、サクラガサイタ。から、ススメ、ススメ、ヘイタイススメ。に変わっていました。

4年生になって淡路島の母の実家に縁故疎開で行きました。その国民学校では、親元から離れて来た私をあたたかく迎え入れてくれました。「大きな丸太の材木を運んだ」伯母さんに言ったら「こんな小さな子どもにそんなことをさすなんて!!」と言って私をいたわってくれたり、おやつに大豆や玄米の煎ったのを新聞紙に包んで毎日用意して食べさせてくれました。

警戒警報になると、各地域に別れて帰宅しました。飛行機が空高くとんでいたので、道の横の溝に伏せたりしました。

ある時、中年のおばさんが、「助けて!!」と家にとびこんで来ました。おばさんの後から飛行機がバンバンと弾を撃って、家の屋根すれすれに飛んで行きました。おばさんは無



事じでした。門もんのところところに弾たまの穴あながありました。

6年生ねんせいになって大阪おおさかに帰かえって来きましたが、見渡みわたす限かぎりガレキばかりで、倉くらだけがポツン、ポツンと残のこっていました。実家じっかは空襲くうしゅうで焼やけて、家いえは木きで建たてたバラックでした。食たべ物は毎食まいしょく、さつまいもだけ、じゃがいもだけという食しょくじ事じでした。10歳さいとしつえ上の姉あねは空襲くうしゅうで逃にげるとき火ひを逃のがれるため、川かわにとびこんだり、空襲くうしゅうの後あと降ふった雨あめで白しろのブラウスが黒くろくなったと話し、ブラウスを見みせてくれました。

今いま、豊ほう富ふな食たべ物ものにいつも感かん謝しゃして食たべています。人にん間げんはななぜ努ど力りきして作つくり上あげた社しゃ会かいを破は壊かいするのでしょうか。人ひとの命いのちまで奪うばう戦せん争そうをするのでしょうか。

敗戦後満州国撫順市から 内地へ帰る道中記

和泉市 石川 美喜子 89歳

私は終戦の日、小学5年生でし

た。天皇のあのお言葉を聞いたその

夜から私たちの社宅は一変しまし

た。満人たちが私たちの窓から長い

竿を入れ、かけている洗濯物の衣類

を引っかけて取るんです。目に余る

行為を、声を出すことも出来ず悔し

い思いと恐怖感で口もきけません。

会社は、侵入を防ぐために社宅の回りに電線を張り、知らない犬猫がかかり真っ黒になって

死んでいる。人間は知っている故見なかった。それでも安心して外で遊びました。

都会で住んでいる人たち（日本人）はハルビン、大連から田舎の撫順に流れて来ました。

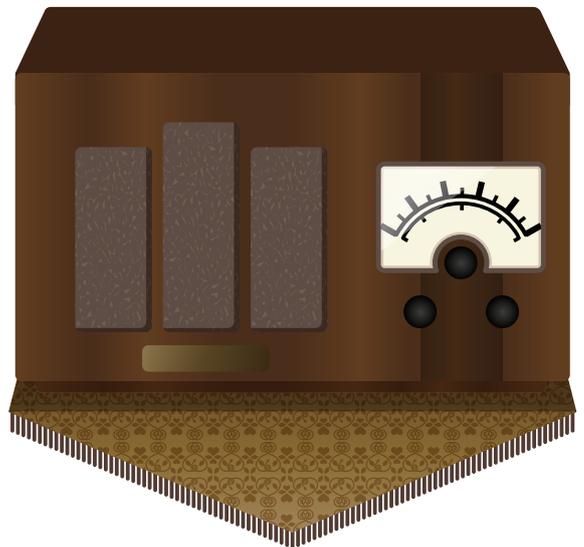
私たちの社宅は、三大家族が一軒に引越し、残った家に流れて来た人たちを受け入れての生活

でした。もちろん会社も学校も無くなりました。これから食べていくのが大変だったと思

いますが、父は三大家族と共に商売を始めました。ポン菓子です。お米、とうもろこしを焼

いただけ何も味はつけていない。それでも、あの当時はめずらしかったものでした。三大家族は

仲良く、私の姉もポン菓子の機械を手伝っていました。



年が明けて日本に帰ることが決まりました。年寄りの家族や子どもの多い家族が優先に、私の家は大家族、両親、姉、私は次女で妹3人弟1人の8人家族です。父は器用な人でそれぞれのリュックを作り、父のリュックは、背中に大きなポケット3つ、そこに子どもたちがよく水を飲むからと一升瓶です。今は軽いプラスチックがあります。着て帰る分はいいが、一升瓶3本は重たかった。それにリュックの中は、夏冬の服は制限法で決められ、それ以上はだめ。着て帰る分はいいが、しかし暑い時に好きな服でも着られません。それでも父は皮のジャンパーを手放すことが出来ず、暑い時期に着て帰りました。おしゃれな父でした。

食べ物に米をいって粉末にして、食べる直前にお湯でといて食べるのです。帰国する第一便列車が来るのを待ちました。目を疑いました。牛や馬を乗せる貨物列車、天井のない汽車、誰も文句は言わない。列車が走り出しました。草原を見ているうちに眠気が来て眠る。目が覚める、また眠る、をくり返しながら景色は同じ草原地帯。子ども心に満州は広いところだと思いました。

今度はキンケンという場所を目指して、皆それぞれ荷物をかっいで、まるでアリののように長い行列を歩く。父の荷物が重そうで、助けようと手を掛け歩きました。今思えばかえって重たかったな。父を元気づけようと妹と歌を歌って歩きました。長い列でどれほど歩いたか。力つきて座り込んでしまったその方は、そこで道ばたで死んでしまったでしょう。キンケンに到着、そこで1週間くらい兵舎に入り、みんなリュックと両手に荷物を持っています。座ることができないくらい狭い部屋で、1週間くらい居りました。毎日コレラチフスで死人が出て、死体は防空壕に上から土をかけるだけ。朝、人間の腐った匂いが鼻をつく、それは夜中に狼が首や胴体、手足をバラバラに食いちぎっているのです。亡くなった方々をどうす

ることも出来ず手を合わせました。私達の団体は、毎日3、4人、多い日は8人も亡くなった日もありました。暑い時期故に死体はうじ虫だらけです。

いよいよ内地に帰る船が来しました。わくわくしました。日本の港に着いているが、コレラチフスの人たちは上陸できず、また死体は海の中ドボン、日本を目の前にし、私たちは悲しい思いをしました。日本の港で1週間くらい船の中で生活、上陸が決まり、その時DDTを体に真っ白に、頭も真っ白にかぶり消毒しました。日本の方が出迎えて、ご苦労様お帰りなさいとやさしく声をかけてくれたあの時の気持ち、本当に嬉しくあの時の情景が頭に浮かびます。また、子ども6人が健康で日本に帰れたことに安心しました。両親のおかげです。

日本は幸せです。戦争をしない国、もう二度とこんなにつまらない戦争をしない国で、安心して過ごせることを祈ります。今は他国の戦争被害を毎日テレビで見ます…どうぞ早く戦争をやめてほしいものです。子どもが可哀想です。いい思い出は大切です。私のように悲しい想いはさせたくありません。しかし今の日本は少子化が進み、未来が心配です。若い方が皆結婚して子どもを作り、人口を増やして、他国に助けを求めるよりずっと嬉しい事です。そうなってほしいです。

わたし せん そう たい けん 私の戦争体験

貝塚市 なか むら 中村 マツ江 え 91歳

私は船場の端の生まれですが、父が軍事工場で役職に付いている関係で、西九条のほうに引越しとなりました。それから妹や弟が生まれ、おじいちゃん、おばあちゃんと続いて死んでから、戦争を経験することになります。

中学1年生の頃、私は女学校へ行きたく先生に話に行ったら、お母さんと一緒にと言われ、2人で先生のところへ行った。先生が「お父さんはどんな仕事をしているの？」と聞くので、「軍事工場で外国の人を相手にいろいろと仕事をしている」と答えると、「あなたは非国民でおれるのか」と、学徒動員に行くように言われた。

さつそく1ヶ月経つてから、私たちの学年は、学徒動員として20人集められた。他には1組50人のグループが3組、それぞれに軍事工場に送り込まれた。

私の行ったところは、公立の商業高等学校で、食堂でお昼のお食事を作った。大豆の油は兵隊さんに送るため、残ったカスが私たちの昼食になった。食べられたものではないが、他



に食べるものがなかった。

食堂のとなりの部屋から、別のグループの男の子が友達同士で節穴からのぞき、今日の当番は誰か見て、帰りに待ち伏せていじめをしてきた。「今日当番やったやろ、お昼の盛りが悪かった、減らしたんやろ」と言っ叩いてくる。女の子が叩かれたらかわいそうなので、私が当番の子に付いて帰り、駅まで連れて行った。

昭和19年3月13日、大阪大空襲

王子製紙から500メートルほど離れたところから、火がついた円盤のようなものがあちこちから飛んできた。上からは焼夷弾が降ってきて、それを落とさないようにつかまえて、毛布にくるみ、防火水槽（各家庭に水を貯めていた）に入れると「シューッ」と水しぶきをあげ、すぐに伏せてその様子を見ていた。

2、3日して、担任の先生が行方不明という連絡が入った。手分けして探そうとなり、私は大阪市内の木津川に逃げたんじゃないかと思い（遊郭があり、そこに逃げる女性が多かったので）、向かった。道中には黒く焼けた人が転がっていて、つまずいた。「助けて」という声が聞こえてきて見ると、体が半分以上焼けていた。

木津川は、たくさん遺体で黒くなっていて、その中に先生の遺体が見つかった。水で体がぶくぶくに膨張した姿を見て、思わず泣いた。先生の遺体を学校へ運ぶため、大八車に乗せようと、まわりの人と協力して乗せ、学校へ戻った。戻った頃には体から水が抜け、先生は元の姿に戻っていて、「先生の顔になったなあ」とみんな笑い合った。「これで先生とお別れしいや」と言われ、惜しむ間もなく、それぞれまた元の持ち場へと帰っていった。

せん せん ゼロ戦とグラマンの空中戦

藤井寺市 平 祐治 90歳

昭和20年、台湾台中市の上空をB
29（3機編隊の50機位）が青空を暗
くする。日本軍が高編隊で向かい
つが届かず、音と共に黒い点々が
くだけで日本の本土へゆうゆうと通
過した。

その2日後に、友達3人が下校途
中いつも遊ぶ師範学校の50mプール
に着いたとき、空襲警報と同時にグラマンが日の丸をつけて通過した。後から、ゼロ戦が追
いかけて空中戦となるが、その前にグラマンが補助タンクを切り離し、シュ、シュ、シュと白
い線を引いて大きな音と共に師範学校の並木（横は川）に落下した。空中戦は相互1機ずつ
墜落し、グラマンの方は落下傘でゼロ戦はそのまま突っこんだ。

私達は小学六年生だったが、グラマンが日の丸をつけていたのが未だに納得できずにいる。

〈引揚げの体験〉

昭和20年8月15日、小学校運動場のラジオ塔から、天皇陛下の玉音で終戦を知り正座して



泣いた。

翌日からは、登校しても授業は中止、友達以外日本語で話は出来ず、中国語の練習となり、中国語を理解し会話可能にはなった。まず中国の国歌（サンミン・ツイー）から教えられ、その後は行進曲（チンテイパイズ）を覚えさせられ、その他の勉学はなかった。

12月に、日本へ帰国する第一希望者（親戚で出征兵士の家族）に引揚げ通知がきた。条件として、1人リュック1個、持参金1000円と写真は一切だめ。したがって、我が家はリュック7個、現金7000円。その準備に父母は大変だった。20年生まれの乳子の分に苦労した。

汽車は軍港キールンへ向かい出発したが、300mくらい手前で止められ、支那人が銃剣を持って乗り込み、「1人100円を出せ」と没収し、写真はないかと銃剣でリュックを調べた。軍盤と思うが乗舟から鹿児島が見えたが、湾内は機雷が多く上陸は中止、和歌山田辺港に変更になり4日後に上陸。DDTの消毒を受けたその2日後に田辺駅を出て奈良、大阪（ムギにぎり弁当をもらい）、広島（ピカドンの焼け野原）、関門トンネルから九州に入り小倉、熊本、そして鹿児島出水駅で鶴の声で迎えられ、26時間かかって故郷に着いた。台湾を出て15日目に荒崎父の里に着いた（昭和21年2月11日だった）。引揚げの第2部の人達は昭和21年末に日本に帰国したが、何の制限もなく家財道具全部持ち帰られたと聞いた。

エエーツ 麻酔薬が無い

河内長野市 匿名 96歳

昭和20年、職の自由はなく、国策で岡山の軍服縫製工場にいた。戦況は次第に悪く、食糧も日増しに質量ともに落ち、気力だけではどうにもならぬそんなとき、地元勤めの人々が「口の堅い人だけ」と耳打ちしてくれたのが煮大豆だった。豆を水に浸して、塩少々で柔らかく煮たもので、コップ一杯がいくらかというものだった。「分かりました、よろしく」と言ってお給料はほとんどこの大豆に使った。

それから半年後の6月初めのこと、朝起きると足の裏が痛くて歩けない。見ると大粒の大豆を半分埋め込んだような豆が4つと2つ、次第に激痛に変わった。事務所へ届けてくれて、労務さんが来てくれた。医者行きの手意をしていると、あちこちから同じ症状の人が一気に数人に増えた。囑託医に連れて行ってくれたが、足の裏をちよっと見ただけで、どうしたのか手間取っている。「お待たせしました、この足の裏の豆は、切り取るよりほかに方法は無いのですが、実は麻酔薬が全くありません」「エエーツそんなあどこか探してください



「いやどこを探しても、全部戦地へ送られて、もう内地には無いのです。そこで相談したのですが、方法といたしまして、痛みを軽減するため、足首の血が止まるほど、力いっぱいきつく縛ります。動く大変なので、全員でしびれるほどに強く押さえこみます。出来るかぎり、手早く、手際よく済ませます。これで、少しご辛抱いただきますように」

無言で顔を見合わせた。「こんなこと初めてですが、この豆は何ですか？」と聞くと、小さい声で「栄養失調と思われます」と言われた。取ってもらわないと一歩も歩けないので、やめますと言いたいけど言えない。いやしかし怖い、誰が一番にするの…と怖いと言いながら、いつの間にか、後ろに回って押し出されている。「ええつなにに!？」と思っただが、もし後になって先の人に喚かれたら、決心が鈍る…仕方なく臨んだが、この痛みたるや、半端ではない。背中から湯が沸く、目から火が出る。「ウウウウー、これ拷問やあ」気絶寸前、やっと終わると「お疲れさま」と、松葉杖で別室へ案内された。ドアを閉めたが、痛い痛い悲鳴が聞こえ、疲れがどっときた。「お国のためとは言え、これが平和な世なら人道問題ではないか。よくあの辛抱ができたものや」と、教育の怖さを思った。

戦後50年も過ぎたころ、新聞で驚きの真実を知った。

広島に宇品という軍港があつて、戦地へ送る食糧、弾薬、医薬品を集結し、出港しても、すべてをお見通しの相手にほとんど撃沈され、肝心の戦地には届かず、餓死者が多かつたという。

大切なお父さん、息子を戦争で奪われ、どれほどの人々が悲しみ、困難を極めたか。無謀な戦争は善良な国民をとことん苦しめて終わった。

どんなことがあるうとも、戦争だけは絶対になりませぬ。

亡くなった祖母や伯父から

聞かされた戦争の話 ～情報統制～

堺市 匿名 53歳

祖母の話…当時の住まいは奈良県

天理市。出征間近の祖父と16歳で見

合い結婚、2週間の新婚生活だった

そうです。妊娠をハガキで伝えたけ

れども、返事はなく、心細い日を過

ごしていた1945年3月14日、未

明に目が覚め、お手洗い（当時は外

にあった）に出て、ふと西の空を見

ると、山並みの向こうに茜色に美しい空が広がっていたとのこと。神仏の御業かと思ひ、思

わず手を合わせ、子どもが無事に生まれてくることと夫の帰還を祈ったそうです。…大阪大

空襲の夜でした。その夜、たくさんの命が失われたことを知ったのはずっとずっと後。何も

知らなかった自分が恥ずかしく悔しくて泣いたと言います。

また戦争が終わった直後は、「こんなもん持ってたなら米兵が来て皆殺しや」と、蔵を見に

来た「役人」を名乗る人たちに騙されて、鎧兜や錦の旗などを持ち去られたとのこと。祖母

曰く「人の善悪は国や肌の色とちやうねん」。



伯父の話…1945年初夏。伯父は家の手伝いで牛馬や重機の扱いに慣れていたため、他の子が京橋の兵器工場で作業につく中、外の復旧作業に回されることが多かったそうです。その日は、前週に激しい空爆をうけた鶴橋から天王寺にかけて、がれきの撤去作業を指示され、伯父だけ仲間とわかれて南へ。夜、帰宅すると大人たちが村の入り口まで出迎えにきていて、「京橋が空爆を受け、2人がまだ帰ってこない」とのこと。先に帰った子どもたちは「知らん」と泣くばかり。夜が明けのを待って大人たちと京橋へ向かうと、兵器工場の分厚い塀が数mに渡って倒れており、子どもたち曰く「このあたりで見失った」と。自分たちだけが助かったことが申し訳なく「下敷きになったと、よう言わんかったんやろ」とのこと。「大人4人、半日がかりで塀を除けてみたけど、ぺちゃんこで形もあらへん。はっきり言わんから、親は、もしかしたらといつまでもあきらめがつかん」それがつらかった、といいます。

また、玉音放送を聞いてしばらくした後、長崎に帰ってきた長兄を迎えに父親と、列車で西へむかった時のこと。広島に入ろうかというところで、突然電車を降りるように言われ、バスで移動することに。「絶対にカーテンを開けないように」と窓をふさがれた車両で移動し、「ここからは歩いて次の駅を目指しなさい」と降ろされた場所は、見渡す限りすべての木々・建物の高さ1mから上が、スパッと切られたように、ない。「残骸もなく、不思議な光景やった。きっと原爆の爆風で吹き飛んだあとなんや。戦争が終わっても、すぐには公表されんかったから」

伯父曰く「お前が生きてるうちに、きっともう一回戦争が来る。何が正しいのか、自分の頭で考えて、ようよう判断せなあかん」

そんな日が来ないように「自分の頭で考えて、ようよう判断せねば」と思います。

戦争という言葉語り伝える事

南河内郡河南町 大村 まり子 62歳

私の父は戦中、戦後、幼少期を過

ごしました。鹿児島県出水郡の辺り

は何もなく、また、7人兄弟の4番

で決して裕福な家庭で育ったようで

はなく、食べる物はさつま芋の蔓が

主な食べ物で空腹を満たす為に他人

の畑のらっきょうを盗み食いし、水

を飲んでいたそうです。

学校で必要な教科書は買えず、父親に泣いて頼み鶏を買ってもらい、産まれた卵を町に歩

いて売りに行き、そのお金で教科書を買って勉強したと聞きました。また、ワラ草履があれば

良い方で裸足だったそうです。「今の子供は贅沢だ」と言っていました。

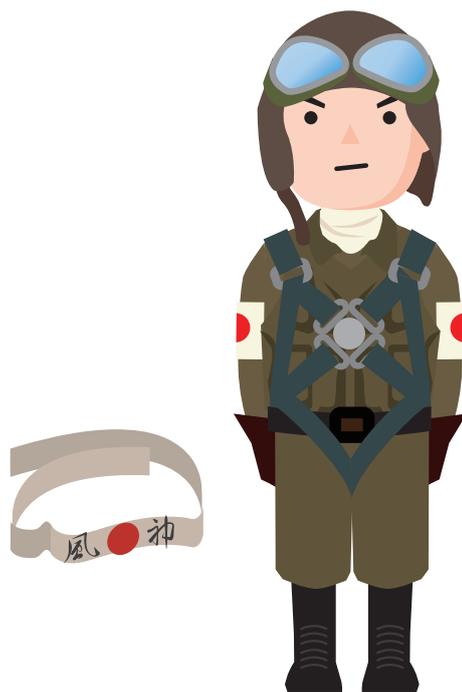
そんな父は今では天国に旅立って行きましたが、今現在の日本があるのは戦争で私達の為

に、日本の国を守る為に大切な家族や恋人と別れ、一生懸命に戦っていた方々のおか

げである事を決して忘れてはなりません。知覧に訪れた時に知覧特攻平和館にある写真やお

手紙を拝見いたしました。歳は14歳の少年もおられ、家族に送られた先は全てお母様へのお

手紙でした。どんなに悲しい思いでつづられたのでしょうか。私は心痛と共に涙があふれまし



た。2度とあつてはならない戦争です。人を悲しませる事はしてはならぬ事です。日本の為に戦い、現在の日本がある事に亡くなられた方へ感謝をすることを感じ、決して忘れてはならない戦争があった事を、私達が若い世代に語り伝える事を続けてゆく事が大事であると深く思います。

日本は敗戦をしました。戦争に負けたという言葉認めず、あえて敗戦を終戦という言葉にしたようです。最後に戦地で御苦労されました方に感謝の気持ちをお伝えいたします。ありがとうございます。

2023 年度
戦争体験＋プラス

勉強べんきやうしたくても できない

和泉市 伊東 恵子 いとう けいこ
74歳



戦後せんごう生まれの私わたしには、戦争せんそうなんてはるか昔むかしのことと思おもって
いましたが、だが現実げんじつに起おこっていて、ニュースで見みるとつ
らいです。

なんでなんで戦争せんそうは起おこるの

領土問題りょうともんだいなのだろうか？

私の母わたしははは、昭和3年生しやうわ ねんしゆ生まれは、孫まじたちに「しっかり勉強べんきやうしいや」
が口ぐせ。おばあちゃんは勉強べんきやうしたくてもできなかったんや
から、とよく言いっていました。おばあちゃんは、時代じだいだった
けど損そんや…上の姉あねたちは、女学校じよがっこうやお針はりの学校がっこう（洋裁学校ようさいがっこう）
に行かいせてもらったのに、私わたしは砲兵工廠ほうへいこうしやうという環状線かんじやうせんの工場こうじやう
に行くいくことになって…と。器用きゆうだったので、兵隊へいたいさんの服ふくの
ミシンのがけの時に服ふく作りを覚おぼえ、夏服なつふくはよく作つくってくれまし
た。そして鉄砲てつぽうの弾たま作りもしたそうです。学校がっこうに行いってもウー

ウーサイレンが鳴り、勉強どころではなかったそうです。竹やり訓練もあり、心の中でこんなんで大丈夫かな
と思ったけれど、先生に従い、何も言えず、言われるままにやっていたそうです。

母の姉は阪神電車の甲子園のキップ売り（駅員）をしていました。それだけ男の駅員さんがいなかったから
です。実家は今もありますが、甲子園球場の近く（米屋）でしたが、焼夷弾で焼け出され、蔵の米が炒れてし
まい（こげてしまっても）、近所の人を取りに来てもなすがままだったそうです。それだけ食べ物があったの
です。母は地元なので、甲子園に仕事に行き、阪神園芸のグラウンド整備で有名な藤本のおっちゃんに聞いた
話では、甲子園でも芋を植えたそうです。

母は兄弟8人、兄は兵隊に行きましたが、帰ってくるのができませんでした。爆弾が落ちた時、父に武庫川の川
に浸かれと言われ、下の弟妹たちと3日ほど川に入っていたそうです。私が3日も、とびつくりすると、川に入っ
たり、遊んだりしていたとか：タンポポを食べたとかとも言っていました。3日目に父が迎えにきてくれた時
にはホツとして、体中の力が抜けたそうです。それから能勢の遠い親類を頼って、下の弟妹たちと疎開をした
から無事だったと聞きました。

戦後のどさくさに結婚、嫁入り荷物も作ってもらえなかったと言っていました。みんなそうだったのでしょう。

年を取ってから、疎開先の喜田商店にお礼が言いたいと言っていました。それもかなわず…平和はありがたいですね。

私の体験記

八尾市

柴田孝子

82歳



平和な世の中、戦争には興味がなかったのですが、最近口
シア、ウクライナの現状を見て、若い世代の人たちに現実を
知ってもらいたいと思い、記しました。

私は昭和15年9月13日生まれ、私の知っている戦争は、4
歳の時、火の中、本当に真っ赤な火の海の中、母親に手を引
かれ、弟は2歳、背中におんぶされ、姉2人（昭和10年生ま
れと12年生まれ）は、後からついてきたのを覚えていません。

住んでいたのは、北御堂さんの裏、横堀だと姉から聞いて
おります。

近所の人たちと一緒にもぐっていた防空壕、中は真っ暗が
り、ひとりのおじさんが外をのぞいていた時、急に爆弾が落
ちたのか、真っ赤になったのが目に入りました。その瞬間、
おじさんは、「アッ」と言って、あわててふたをされたのを

覚えています。家の縁の下にも防空壕がありました。その日か翌日かわからないのですが、近所の人たちと逃げたのが一緒だったので、その人の親せきの家、大阪の田辺におられるということで、一時的に連れて行ってもらいましたが、4歳の私には歩くのが大変で、大人の人についていけず、「ほって行くよ」と言われ、泣きながら歩いたため、よく歩いた、と親が生きている折、話題になっていました。

あまり記憶がない中、4、5場面、頭に残っています。

戦後、焼け野原に行き、使っていた丸こげになった豆の入った鍋を持ち帰り、長い間使っていた記憶がありました。

姉2人は篠山へ疎開、6年生の姉は学校から帰ってから、配給米かな？お米を夜中、満員の汽車で持ってきてくれるのです。福島区の野田まで、6年生の女の子が梅田（大阪駅）を通過してよく来てくれた、と語り草になっていました。食料難でもあり、大変なことでした。

1年生の時、私あまり汚いのでしよう、担任の橋本先生、先生の自宅は福島区の野田小学校の前にありました。夕方、私を迎えに来て、お風呂に入れてくださいました。白いタオルで身体を洗った後、「こんなに汚いわ」と言って、黒く汚れたタオルを私に見せてくださいました。

その年、ある日の夕暮れ、母はじめ家族・親戚は、戦争に行って死んだとばかり思っていた父が、突然、薄暗い玄関先に立っている姿は、黒い物体にしか見えなかったので、驚くばかりでした。母の実家、大野町2丁目に、母もボオーっとしていたようでした。

父はシベリア(ロシア)で木が倒れ、背中に大けがをしたので、日本に帰って来られた、と言っていました。帰ってきたとはいえ、やはり苦労はありました。

今、日本は幸せな日々を送っています。テレビでウクライナの映像が出るたび、涙しています。世界人類、なかよく、平和に暮らしてゆきたいことです。

絶対戦争はいけないと思います。

終戦後の学校

東大阪市

田川 行雄

92歳



みなさまそれぞれの場所で恐ろしい恐怖の体験をされ、食糧難を耐え忍び、ここまで生きながらえてこられた方ばかりの戦争体験、私がこの目で見た悲惨な状況と重ね合わせ、いかなる理由があっても戦争は絶対に起こしてはなりません。

いつも犠牲になるのは私たち庶民です。

終戦の放送は、学徒動員で飛行機の部品を造っていた工場で聞きました。初めて聞く天皇陛下のお言葉は、雑音の多いラジオで聞きづらく、難しい言葉は理解ができませんでした。後のアナウンサーの解説で、ポツダム宣言受託、無条件降伏と知りました。灯火管制は解除されていませんでしたが、その夜から空襲警報は鳴らなくなりました。

9月になり、2学期が始まりましたが、学校に帰ってきたのは半数ほどで、まず芋畑になっていた運動場を地ならし、

横一列になり腰をかがめて前に進み、石ころやごみを拾い、運動のできる状態に戻しました。運動場のすみで草抜きをしていた老先生が教壇に立ち、「人民による、人民の政治」と唱え出したのには少々驚きました。

教科書は、今まで使っていたものは、先生の指示に従って軍国主義的なところは墨で塗りつぶし、訳のわからないものになりましたが、使うことはありませんでした。

出征して行った先生はまだ復員せず、授業ができないので、焼け跡の整地に勤労奉仕でかり出されました。道路を埋め尽くしたがれきをスコップですくい、道幅を拡げ、大八車やリヤカーが通れるようにしました。埋もれた防空壕から焼死体が見つかり、先生に報告、役所の職員が一か所に集め、燃え残りの木材を積み上げて茶毘に付しました。一同みんな黙とうをしました。

兵庫での戦争体験

堺市

竹下 貴美子

84歳



たしか私が6歳の頃、兵庫の塚本というところに住んでいた。空襲警報のサイレンが鳴らないときは、国防婦人部の人たちが2階ほどの高いところに設置した樽をめがけてバケツの水をかけていた。防火訓練だったと思う。祖母は避難する
ときの食べ物として、少しだけの米を炒り、茶筒に入れ、リュックに入れ、防空壕に入った。

その晩に空襲になり、父は湊川公園近くの水道局に勤めていた。母は最後まで家を守り、祖母と私、弟の3人は近くの学校に避難した。家を守っていた母は、最後にふとんを頭からかぶり、父の会社まで行ったとのこと、道中何人も人が焼け、後に黒こげになり、水道管の破裂したそばで転がっていた。私も小さいなりにその光景を覚えている。家は丸焼け、その後父の友人宅にお世話になった。

食べるものもなく、近くのとうふ屋で洗濯のりに使うような、丸い団子のようなものを買う。それで飢えをしのいだ。その頃は口に入るものならなんでも食べた。今の時代には考えられない。祖母の作ってくれたハコベ（雑草？）のおひたしはおいしかった。

テレビで見る最近のロシア、ウクライナの戦争の光景は、自分たちも同じだったのかと見入ってしまう。もうこんな光景は見たくない。今は時間が来たら、充分食べられるものまで廃棄する時代、今に食べられないときがくるのではと考えさせられる。

私の場合は、原爆の恐ろしさは、小さいころ映画で見たことでしか知らないが、戦後77年が過ぎた今でも苦しんでいる人がいる。経験した人しか本当の苦しみはわからない。

地球上から戦争というものが一日でも早くなくなり、世界が平和、みんなの笑顔が見たいです。

見^み上^あげると夕^{ゆう}焼^やけが

岸和田市 中道 キヨ子 82歳



今、私は82歳です。78年前、父が戦地に行っている間、母とともに佐賀に疎開していました。母は農家の台所を預かって食事の用意をする、いわゆるお手伝いをしていました。その家の土間は広くて、3歳の私は外に出たり、母の側で走り回ったりと、今思えば、母の実家と生きていたのでしょうか。

広い敷地の外には深緑色の水が流れている堀のような水路がありました。佐賀の地方は山がなく、広い田畑が続いており、お米を作る水路だったと、後になって理解しました。夕方になり顔を上げると、田畑の向こうに沈む夕焼けが大空を赤く染めていたことを思い出します。

疎開先でも終戦近いころは、B29が低空飛行で飛来してきました。飛行機の音が近づくたびに、防空壕の中に逃げ込みました。防空壕の中は大勢の人でいっぱい、機関銃の音が

鋭い光を伴って激しく鳴るたびに、「この中に弾が撃ち込まれたらみんな死んでしまう」と、幼いながらも感じる状況でした。

ある日、防空壕から少し離れたところを母と歩いていた時、B29がエンジン音とともに近づいてきました。母は私を抱えて深緑色の水路に入り、相手に見えないようにかがんで息をひそめました。機関銃の激しい音が聞こえましたが、私は水の冷たさと恐ろしさで母にしがみつくことに必死でした。

戦争が終わった後、佐賀から八幡に戻りました。戦地から帰る父を待っている期間、母はおにぎりやいもを蒸して、私を連れて小倉の商業地まで生活の糧を得るために出かけました。そこにはたくさんの人がいて、子どももたくさんいました。そばには大人はおらず、親を亡くした子どもだと気づきます。人ごみの中、母の側を絶対に離れてはいけないと思い、ぴったりとくっついて歩きました。今でも戦後の闇市の映像が白黒でテレビに映りますが、その映像を見ると、母と疎開した地を思い出します。それも白黒の映像ではなく、鮮やかな色で焼きついているのです。

父がようやく帰ってきて、また親子3人の生活が始まりました。夕焼け空を見上げるたびに今でも思い出す、あの深緑色の水路の色と、田畑に広がる鮮やかな夕焼けは、私の生涯の中でも強烈な印象とともに、鮮明に私

の脳のうに刻きみ込こまれていいます。

昭和の時代は 国がみだれていきます

藤井寺市

みなみ 南

はるお 治夫

86歳



私が生まれた昭和12年の時、二・二六事件がありました。

また昭和16年12月8日には、アメリカとイギリスと戦争をす

ることになりました。私たちは街道に出て、日の丸の旗を持つ

て、バンザイ、バンザイ、と喜んでいました。国民は町を挙

げてお祝いしました。

18年の春には国民学校へ行くことになり、進みましたが、

2年生途中からアメリカ軍のB29戦闘機2機が、約1万m上

空から写真を撮り、夜になると大阪の森ノ宮に軍需工場が

あったのですが、毎日毎日夜になると空襲で焼夷弾を投下し

ていきました。私たちは玉造に住んでおり、大阪の町を明る

く見ていました。

日本は17年6月には、空母赤城、加賀、蒼龍、飛龍と大型

空母を失い、敗北戦となって、この時から日本の植民地がア

メリカ軍に取られていき、19年10月頃からはサイパン島からの空襲が大阪にもやってきました。

学校に行ってもサイレンが鳴り、すぐに帰れと言われ、家ではすぐに防空壕の場所まで行き、中には町会の人たちで大勢の人。少し時間が過ぎると町会長の人たちが、空襲解消と呼び回って、外に出ると、近くに焼夷弾が落ち、大きな穴があいていました。防空壕と言っても、五分板を並べて上から土を少しかけてあるだけ。私たちは食べるものがなく、母親は朝早く自分の着物と宝物を持ち出して、電車に乗って買い出しに行き、食べ物と物々交換して帰ってきました。もし家に火がついた時に消すために婦人部でも火を消す訓練をし、出ないと「非国民」と言われて配給物がもらえなくなりました。毎日毎日B29の飛行機が昼夜と言わず森ノ宮の軍需工場へ焼夷弾を落として夜空は明るいままでした。

19年の11月に疎開をし、先に石川県七尾、母親の兄姉の住んでいるところへと行き、間借りをさせてもらいました。食料がないし、父親は大阪で家財を片づけてから七尾へと来たけれど、仕事がなく、家族7人です。身内の方からも苦情を言われ、21年の春、福井県芦原の父親の里へと移りました。家は牛の家、部屋はわらを敷き、上にむしろを敷いて作った一間に7人が住みました。冬には戸もない小屋にむしろを1枚つけているだけ。私たち疎開者は学校も遠く、子どもで片道1時間はかかりました。冬の学校はつらく、靴がないので草履か下

駄でしたが、農家の子どもはわら長靴でした。私たち疎開者にはありませんでした。学校に着いてもストーブもなく寒い。でも帰り道、海が近いため、一升瓶に海水をくみ、持ち帰りました。家にはみそも塩もないためです。帰ったら足がしびれていましたが、すぐには囲炉裏火はだめで、井戸端へ行き、約30分ぐらい足に水をかけてから囲炉裏火にあたるようにしていました。父親は雪が30〜40mもある山へ行き、枯れ木を取ってきていました。足元はわらじで、指先にボロ切れを巻き、枯れ木を取り、囲炉裏火を燃やしていました。寒いとき、屋根にすらがで、太いものでは50cmはある、当たればけがをするような氷でした。

小学校3年生の2学期、田舎の学校には本がありません。先生がガリバンを刷り、本を作りました。食べるものがないため、道に生えている草を取り、虫が食べる草は人間も食べられます、と母親が言っていましたし、畑に雪が少しあって、いもの葉っぱを見つけると、じく菜を取り、湯がいて食べました。

この世に神仏があると思いますか？私はないと思います。

文章はなかなか書けません、知ってもらいたいと思います。

2022 年度
戦争体験＋プラス

機銃掃射と玉コロ喪失

かわぎし じょういち
岸和田市 川岸 丈一 89歳

空襲と言えば、B29が編隊を組んで日本全国の都市や工場に爆弾や焼夷弾の無差別爆撃を連想しますが、それは1945年（昭和20年）3月10日の東京大空襲以後で、それまでは艦載機の飛来や、九州地方には中国重慶からの来襲がありました。戦勝ニュースのかけに隠され、問題になりませんでした。

父の会社は陸軍の軍服の縫製業で、布地の裁断から縫製、ボタンつけと一貫作業でした。国家総動員法のもと、軍の命令でボタンつけは遊郭のお女郎さんたちの仕事となりました。形式主旨にこだわり、簡単に済む仕事をわざわざ大阪市西区の松島遊郭（当局の指定先）に運び、お女郎さん方にボタンつけをしていただき、完成品となり、改めて軍に納品するのです。

男子労働者の不足のため、昭和19年の新嘗祭の日に小学校6年生の私を手伝いを父から命じられました。オート三輪で大阪までドライブです。ガソリンはないので荷台にセットされたボイラーの水を木片で沸騰させて、

その蒸気でエンジンを動かすので馬力は出ません。荷物を積むと出力が衰え、大津川の坂は上げません。そのうえ、道路の舗装が崩れ、でこぼこの多い道をガタガタゆれながらの走行です。和泉府中を過ぎるとさらに悪くなってきたので、山手の古い街道を進みました。家並みが途切れ、周囲が明るくなった瞬間、目の前に鉄の塊というか、ガラス玉の怪物が現れました。艦載機グラマン戦闘機との遭遇です。

驚いたのなんの、言葉は出ません。心臓が早鐘を打ち、足の先から震えが全身に走り、恐怖のため思考力は全くなくなりました。運転手のお兄さんはハンドルを切り損ね、道路から外れ下の空き地へと突進しました。が、これが幸いし、ガリガリ、バリバリと銃声が聞こえ、砂煙が上がっていますが、幸運にも直撃を受けずに済みました。ただただ震え、虚脱状態で怖い意識はまったくありませんでした。幸い飛行機は旋回して戻ってくることなく、飛び去りました。

しばらく茫然自失状態でしたが元氣を取り戻し、大阪に向け出発し、目的地に着き、また驚きです。

今度は恐怖でなく、ゾクゾクする甘い身震いです。豪華な家並みの一軒に入ったところ、玄関先に女性たちの写真が飾られ、何かしるしがついていました。わくわく喜び勇んで荷物を3階の作業室に運び、また驚きです。そこには赤い腰巻に長じゅばんの、しどけない姿のお姉さんもおり、うれしくなりました。なんとなく身体がしっ

くりしないのでトイレに行ったところ、チンチンはあるが玉コロはありません。玉コロいずこと悲しくなりました。後年、哺乳類のオスが危険に直面すると精子を守るため、無意識に内蔵されると学びました。

年が明け、中学受験準備に専念しました。

3月14日の大阪大空襲で、お姉さんたちは炎と熱気を避けるために近くの木津川に逃げましたが、川の水が沸騰しており、即死の状態で亡くなられたと聞かされ、涙が出ました。

戦争の犠牲者は広島、長崎だけではなくありません。苦しみながら死んでいき、忘れられた人がたくさんおられます。このことは日本人として忘れてはならないことです。

安らかなご冥福をお祈りいたします。 合掌

(本文中に一部性的な表現を含みますが、ご本人の意思を尊重し、原文のまま掲載いたしました。)

こんな時代があった、13歳の夏

こみなみ さくろう
堺市 小南 朔郎 89歳

昭和20年3月、集団疎開先の福井県小浜市郊外の禅寺から、卒業のため大阪市城東区中浜小学校へ、6年生だけの卒業式だった。

4月～5月、私は大阪市天王寺区にある官立大阪第一師範学校附属小学校高等科（現在の国立大阪教育大学付属中学校）に入学したが、空襲が激しくなり、授業中に校内の防空壕に入ることがたびたびあった。

6月15日授業中、空襲警報が鳴り、アメリカ空軍のB29爆撃機数百機が3千トン以上の焼夷弾を大阪市内に投下しはじめたので、授業は中止、ただちに下校し、通学駅の寺田町駅の改札口に避難。改札口の真上の線路、学校および駅周辺に焼夷弾が落下し、学校に残った上級生は、母校を焼くなど消火活動中に、焼夷弾がさく裂して死亡、後日学校葬があった。その日、路線は不通、寺田町駅から森ノ宮駅の4駅の距離を徒歩で家にたどり着いた。

戦況が激しくなり、学徒動員令により最年少の動員生として、旋盤を使っ

て航空機の部品を作るため、和泉市内の軍需工場へ行くことになった。2 駅離れた北信太駅近くにある学校の寮から工場へ徒歩で通い、7 月～8 月の夏休みもなく、連日作業に追われ、勉強どころではない毎日だった。

8 月13 日、家から電報があった。17 歳の兄に赤紙が届き、「14 日大阪第8 連隊へ出征すぐ帰れ」とのこと、帰阪した。

翌14 日に兄を見送り、ただちに軍需工場へと家を出るとき、空襲警報が鳴り、今回はわが家近くにある大阪市城東区森ノ宮の大阪陸軍造兵廠兵器製造工場への空襲だった。女、子どもは逃げろ、工場から離れよ、と指示があり、母と逃げる途中、1 トン爆弾数百発を積んだB29 爆撃機約50 機が頭上近くに迫り、城東区城山公設市場付近の防空壕に逃げ込むと同時に、近くで1 トン爆弾がさく裂した。轟音と地響きで、壕内で全身がもんどりうち、爆風で眼球が飛び出し、轟音で鼓膜が破壊されるのを防ぐために、眼と耳を押さえることで必死であった。波状攻撃してくる間に壕から這い出すと、周囲は砂塵で薄暗く、その中で木製電柱が粉々になっていた。遠く近くで爆弾が落下し、次は真上か、もうだめかと死の恐怖を感じた。

数時間後、警報が解除され、爆風で大屋根に飛ばされている人を見ながら家路に着くと、自宅横には1 トン爆弾がさく裂、すり鉢状の深い大きな穴が空き、家は吹っ飛んで柱5、6 本の状態になっていた。攻撃目標の

軍需工場はすさまじく破壊され、多数の人が死傷された。これは終戦の15日の十数時間ほど前のことであった。母と私はその晩、破壊を免れた無人の家で夜を明かした。終戦とは知らず、北信太の学校の寮へと向かうとき、森ノ宮駅は線路が破壊されていたので次の玉造駅まで歩き、やっと寮にたどり着いた後に、終戦を知った。

数日後、寮から級友数人で数キロを走り、大阪湾の助松近くの海岸へ。これからは焼夷弾で焼死か、爆弾で爆死しないで生きられると、何か訳のわからない歓声をあげながら海岸を走り回ったことを、あれから平和な77年、私の90歳の脳裏に夏が来ると、鮮明に思い出します。

戦争は負の遺産

堺市 ^{たかまつ}高松 ^{あつこ}篤子 90歳 (代筆 西野朝愛)

私は、昭和7年、大阪府堺市で呉服屋の娘として生まれ、何不自由なく育てられた。小学生の時、すでに戦争が始まっていたのだろう。深くも考えず、「♪肩をならべて兄さんと 今日も学校へ行けるのは 兵隊さんのおかげです♪」という歌が流行すると、友だちと、「♪○○ができるのは 兵隊さんのおかげです♪」と替え歌を作って歌っていた。また、熊野小学校では、正門横に、明治天皇が座ったイスを納めた建物が建てられ、通る時は建物に向かって礼をして入ることが徹底されたり、学校から配られるパンも、先生に言われて、家から持って行った草（1mくらい）の乾燥させた葉っぱと、なんばきびの粉を混ぜて作ったパンに代わることもあった（おいしいしかなかった）。

長引く戦争中の町の様子は、出征兵の腹巻きにする布に、千人針を頼んでいる人の姿や、バケツリレーで消火訓練する人たち、母などは国防婦人会から言われて、軍服を縫っていた。自分の家に、いつ爆弾が落ちるかも

わからないのに……。子ども心に、戦争に勝てるはずがないと思っていた。

女学校1年生の時、授業はなく、学徒動員として昭和アルミの工場に行くことになった。1年生には仕事がなく、行くだけだったが、空襲警報が鳴ると、「1年生は帰れ！」と言われた。サイレンが鳴り響いている時だ。艦載機は爆弾は落とさないが、Uの字のように、地面スレスレに降りてきて舞い上がる。逃げ惑う私たちをあざ笑っているようだ。何度も友人と地面に伏せて、怖い思いをしながら帰宅した。そのことを父に言うと、「もう工場へ行くな……」と言ってくれたので、9日間で終わったが、続けて工場に行っていたら、私の命はなくなっていたと思う（10日の空襲では、工場に集中的に爆弾が落とされている）。

20年7月9日、B29が堺の上空を通過し、和歌山方面に行ったので安心したのもつかの間、日付が変わってすぐ、B29が戻ってきた。おびただしい数の焼夷弾が上空でぶつかり合い、イオウのようなドロツとしたものが、私の目の前にも落ちてきた。これが、火事を起こす元なのだろう。このイオウ(?)は、服や体にくっつくを取れず、やけどをする。周りを見回すと、鍋のフタがあったので、それで振り払うのだが、フタにもくっつき、生きた心地がしなかった。

今、思うことは、戦争は、当たり前前の生活も、人の生命も奪っただけであった。

〈追記〉終わりのない旅

フィリピンに、神風特攻隊が出撃した飛行場跡がある。この地から、4600人の若者が飛び立ち、帰らぬ人となった。この地の旅に同行した知人から、「私の身近な人の任務が、兵士に出撃を知らせることだった。戦後、長い年月をかけて、兵士の家族を訪ね、出撃前のようすを伝える旅が続けていた。」と告げられた。この事実を伝えるため、追記する。(西野)

戦争体験

たむら ひでや
藤井寺市 田村 英也 82歳

「敵機来襲！……敵機来襲！……」メガホンでおっちゃん走りながら叫んでいた。同時に爆撃機B29の爆音が頭上に聞こえた。あわてて家に駆け込み、畳の下の防空壕に入った。ところは大阪城の西・谷町4丁目、小生4歳のときであった。家から30mほどのところに日本陸軍駐屯地があり、さらに東500mほどのところ・森ノ宮く京橋に、大阪城を挟んで砲兵工場があった。米軍が狙うには絶好の場所であった。

ある日の早朝、家がぐらぐら動き、ガラス戸が割れんばかりに振動した。爆風の影響であった。しばらくして母は0歳の弟を背中にくくりつけて岡山・豊野村の実家に向けて、着の身着のまままで汽車にもぐりこんだ。小生は窓から車内に放り込まれ、網棚の上に乗った。母は必死にデッキにぶら下がった。トンネルに入ると何とも言えぬにおいと真っ黒なススが車内に入ってきた。車内は死んだように静かであったような記憶がある。疎開先の田舎に1年ほどいたが、B29を見たのは1回だけ、家の中に走って駆け

込んだのは小生だけで、先に学徒疎開していた姉と兄たちは知らん顔で缶蹴りをして遊んでいた。

田舎では白いご飯を食べた記憶はない。1日1回4時ごろ、蒸したジャガイモが毎日の食事だった。それも小学1年の姉と3年の兄がリュックサックを背負って遠くまでもらいに行ったものだったようである。食べるものがなかったため、兄と魚を取りに川へ行ったが、取れた魚は小さく、腹の足しにはならない。田んぼに行つてイナゴを取り、焼いて食べた。これが一番うまかった。遊び相手のいないときは、ひとりで沢に行き、沢ガニを取り、爪をはがしてとって食べた。これもおいしかった。食べものを探しにあっちこちを歩いてみると、牛が草を食べているのに気がついた。牛が食べている草をよく見て、それと同じ草を取って食べた。食べたものではなかった。兄の友だちの家からサツマイモをもらい食べた。腹の足しになり、これもうまかった。それにサツマイモのつるもおいしかった。

幼稚園に通うようになり、おゆうぎをして昼ご飯を食べて昼寝して帰った。幼稚園から出る昼ご飯が一番楽しみだった。何を食べたか、おいしかったかどうかは覚えていない。腹はふくれた。

1年生になり小学校に通ったが、疎開者として、石を投げられたりしてずいぶんいじめられた。運動会の時、徒競走で一番になった。それから、それほどいじめられなくなった。

ある日石垣の上から見てみると、軍服を着たおじさんがひとり笑いながら家の方にやってきた。顔は知らなかったが、それはお父さんであった。1週間ほど家にいたが、父は独りで大阪へ行った。我々が帰る家を確保するためだった。

1年生の3学期から小生は大阪の小学校に行くようになった。岡山弁がなかなか抜けなかった。

そして5年生になったとき、社会見学で伊丹空港に行った。見学場所で飛行機を見ていたら、急に爆撃機の爆音が耳に入った。あわててコンクリートの壁に隠れた。しかし爆弾は落ちてこなかった。この時、旅客機は爆弾を落とさないことを初めて知った。

これで小生の戦争はやっと終わった。

戦争での殺し合いは何とも言えない悲劇であった。

私の戦争体験

はらだ かずお
高槻市 原田 和夫 83歳

私が戦災にあったのは小学1年生の時で、当時私は横浜に住んでいた。空襲警報のたび家の前に作った防空壕へ避難したが、そこから見ていた光景では米軍機に対し日本軍が撃つ高射砲の砲弾はほとんどが届かず、時々当たった飛行機が煙を出しながら真上から落ちてくるようで怖かったこと、東京大空襲の際には東の空が真っ赤になり、しばらくすると多くの人が我が家の前を西へと歩いていったことなどが思い出される。

横浜が空襲を受けたのは昭和20年5月29日の朝で、非常に大規模な戦災を受けることになった。当時の我が家は長兄が徴兵でスマトラに行っており、姉は代用教員として学童疎開に同行していた。二人の兄は学徒動員で家にはおらず、戦災当日家にいたのは父母とすぐ上の兄と私の4人であった。空襲警報でいつものように防空壕に入ったが、まもなく米軍の爆撃機B29が次々と飛んできて焼夷弾を落下させていった。我が家にも焼夷弾が落ち、油が飛び散って表のガラス戸が燃え始めた。防空壕の中にい

ても危なくなっただけ、外に出たが、家の前の電車通りはすでに焼夷弾で火の海になっていた。そんな中を母に手をひかれながら近くの小学校へと避難した。高台にあった小学校から下の方を見ると、焼夷弾が雨のように落ちていて、民家に当たるとまたたく間にめらめらと燃え上がり、簡単に燃え尽きてしまっていた。空襲が一段落した後、我が家があった場所へ戻ってきたが、あたりは一面焼け野原であり、本なども活字がはつきり読めるぐらい完全に灰になっていた。当日空襲をうけたのは午前中であったが、空襲後は油煙で空は真っ黒くなり、まるで雨天の夕方みたいであった。

幸い我が家ではけが人も死者も出なかったが、路上では女の人が赤ちゃんを乳母車に乗せたままの状態で死んでいるのも目撃した。翌日には掘った穴に焼夷弾の殻が山のように積み重なっていた。戦災後は家があった土地にバラックを建てて住んでいたが、家の中にいる時や、母と買い出しに行った際には何度か艦載機による機銃掃射を受け、非常に怖い思いをしたのを覚えている。

戦災後は食料もほとんどなく、配給になるのは大豆の搾りかすやコウリヤンなどだけで、私は栄養失調になってしまった。そのためもあり、終戦後すぐに、父母は父の実家があった香川県三豊郡へ引っ越す決心をしたようである。実家は父の弟家族が後を継いでいたが、急遽蚕を飼っていた離れの部屋を空けてもらい、家族6人

がそこで暮らすことになった。小学校2年生からは普通寺へと引っ越したが、この建物は旧軍隊の兵舎を戦災者と引揚者用に用意したもので、板の間にムシロを敷いて生活していた。当時は衛生状態も悪く、DDT(殺虫剤)でみんなの頭が白くなっていたし、シラミが背中をはっている子も何度か見た。

私が体験した戦争の悲惨さが少しでも伝わり、戦争を繰り返さないうえで役立てば幸いである。

私の戦争体験

みなみかわ こ
岸和田市 南河アツ子 86歳

昭和20年、私の家族8人（両親と子ども6人）は、熊本県阿蘇内牧の駅前に住んでいました。私は小学3年生でした。

初夏のその日は朝から空襲警報が解除していませんでした。夜中、あまりの蒸し暑さに母と私は前庭に出て涼んでみると、突然「ゴーゴー」と飛行機の爆音がして、空を見上げると、B29の大編隊が東の方に飛んで行くのです。すると真っ暗な空からオレンジ色の光の矢が雨のように降ってくるのを見て、「あっ、焼夷弾」と言って、家の中に駆け込みました。母は急いで寝ている子どもたちをたたき起こし、まだ着替えていない姉に頭から布団をかけて、「早く防空壕へ」と叫びました。私は姉と手をつなぎ、路地から大通りに出ると、そのとき「パンパン」という音とともに、煙のにおいがしました。歩いている両側の店のガラスに線香花火のような炎が「パー」と反射しているのを見て、恐ろしくて前に進めませんでした。「おい駅が燃えてるぞ」という声に、振り返りもせず、姉に手を引かれて、防

空壕にやっとたどり着きました。後から来た母は2歳の弟を私に抱かせて、朝飯のおかまを取りに行きました。私は弟を抱いて、防空壕の入り口から見える赤い炎と黒煙を、震えながら見ていました。翌日見に行くと、駅は跡形もなく消えていて、駅長さんが背中に焼夷弾が当たり、大やけどをしたと、人が話をしていました。

それから数日後、昼頃、また空襲があり、飛行機の爆音とともに「パンパン」という音が聞こえてきました。しばらくして畑に行っていた父と弟が蒼い顔をして帰宅し、駅下りのところで、今の機銃掃射にあったと言っています。飛行機がブーンと降下してきて、「バリバリ」体の横を弾が通り抜けていくのを見て、父はかついでいた肥えタンゴを投げ出すと、「ふせろ」と叫びました。ですが6歳の弟はあまりの恐ろしさにその場で目を回し、クルクルと3回まわって倒れたそうです。幸い弾は当たらず、無事に帰ってきました。弟は後々までその話をしていました。そのとき駅前にいた荷馬車の馬が3頭、機銃掃射に撃たれて、血や内臓が駅の溝に流れて大変なことになっていたそうです。その馬肉を取りに行く人を見て、私は肉を食べられなくなりました。また、駅長さんの奥さんもお昼のお膳を運んでいて機銃の弾に当たり、亡くなりました。

戦況が厳しくなり、学校は「お寺」に引っ越ししたり、食事もおやつも唐芋ばかりで、私は栄養失調になりました。その頃学生や中年の人も出征していくようになり、家族の方は前戦に行って敵の弾が当たらぬように「千

人針」を道行く人をお願いしていました。

8月15日終戦の日がきました。私はただB29が来なくなると思い、うれしかったです。小学5年生の時、全校生徒で「原爆の子」という映画を見に行きました。映画が始まると、いきなり「ドドーン」と大音響とともに、真っ黒なきのこ雲がもくもくと空に上がり、地上では焼け焦げたたくさんの人があちこちに転がっているのを見て、あまりの恐ろしさに後を見ることができませんでした。今でも頭に焼きついています。

こんな恐ろしい戦争が二度と起こらない平和な日が続くように、86歳の今日も願い続けております。

私の戦争体験

やまだ ようこ
堺市 山田 洋子 90歳

私の子どもの頃は、大阪の十三も商店街をちょっと離れると住宅街で、近くに松林があり、夏休みにはラジオ体操をしていました。堤防をのぼると淀川まで母とシジミ取りをしていました。父ともよく堤防を散歩しました。

昭和16年12月8日戦争が始まり、空襲警報が常時鳴っていました、防火用水を台所の鍋やヤカンに入れていたことを思い出します。

昭和20年戦争も激しくなり、弟と母は富山へ縁故疎開をしまして、私も6年生で池田市へ集団疎開をし、3月に小学校を卒業し、女学校へ入学して、何も勉強もろくにしない間に6月に入りました。

父はH電鉄に勤務して、いつも早く出勤していました。母は田舎で弟といきましたので、私もいろいろ訓練させられて大変でした。

昭和20年6月5日午前、十三の駅の駅員さんからお父さんが行方不明とこのことで来られて、私も驚いて母に電報を打ちました。母も驚いて汽車で来ました。ふたりで事情を聞きに行きましたら、神戸三宮の駅でお客さんを誘

導していて、元の改札口の横に土のうが積んであって、その中に頭を入れて亡くなっていたそうです。近くに赤ん坊を抱いた女性が黒こげになっておられ、行かない方がいいと止められました。

私も神戸に空襲があつて、父がそんなことになっているとは知らなくて、情けないやら悔しい思いだったのを覚えています。

6月7日母とふたりで仏壇や家の片づけをしていると、空襲警報が鳴り、防空壕へ入っていると、電車が動いているような音がして、外を見ると、真っ赤であわてて夏布団をかぶって、淀川の鉄橋の下へ逃げました。そして前の人の背中の火の粉をみんなで順番に払っていました。爆風は自然の風より強い気がしました。あちこちの鉄橋が落ちたと言ってる人がいて、生きた気がしませんでした。空爆が収まってから、足元が熱いのがまんして、焼け野原の道を（旧）北野中学まで行き、一晩過ごしてお父さんの位牌をもらって満員の汽車に乗って富山へ行きました。

しばらく放心状態のような日々でした。

終戦の日、天皇のおことばをラジオで聞き、何かむなしい気がしたのを覚えています。

十三もだいぶ変わりました。父は一心寺に眠っています。

無題

東大阪市 わたなべ す み こ 渡辺 壽美子 81歳

私の父、栄二は、昭和17年に徴兵され、21年3月に無事復員しました。祖父母、母と私は、浪速区桜川の自宅で、20年3月13日の大空襲にあいました。空襲を恐れ、縄手村に疎開していましたが、お風呂がなく、お風呂に入り、自宅へ帰り、空襲に直撃されました。

祖父は、地区の消防団の団長をしており、5歳の私は、母に背負われて火の海を逃げ、恐ろしかった記憶が鮮明に残り、大正橋の上で馬がいななっていたその声が、今も耳底に残っています。祖父の知り合いの船で、ごちそうになったおかゆの味も、今なお、恐ろしい戦火を逃れ、幼いながら人の温かい心とともに、懐かしくよみがえります。

戦火の翌日、祖父が焼け野原の自宅へ連れて行ってくれましたが、くすぶっていた三輪車が本当に悲しい記憶です。

祖父が、父が戦場に行っているの、孫を育てなければと必死で、食料を調達して食べさせてくれたと聞かされ、81歳になった現在も、ありが

とうございました、と仏壇に手を合わせています。

その祖父が、病気知らずだったのに、父が復員した後に盲腸になり、入院先のベッドでりんごを食べている時、これを壽美子にもやってほしいと聞かされ、いまだに感謝しています。

5年間の空白は、私の心にも大きく影響したのでしょうか。復員した父になつかず、父も苦労したとよく母に聞かされました。

二度とこのようなことがないことを祈っています。

2021 年度
戦争体験＋プラス

父の声

あぶらた み え
堺市 油田三枝 81歳

第二次世界大戦の中、私は昭和14年に生まれました。

私の父は5人兄弟の末っ子で、姉が2人で、みんなで7人兄弟でしたが、父のすぐ上の兄も戦死したそうです。

父は自転車店を営んでいたそうです。

母が妊娠している時に召集令状が来ました。

後になって母が見せてくれた父からの手紙に、男子だったら「功」、女の子だったら「三枝」と名前が書いてありました。

それは私の顔も知らない父が、せめてもの私への愛情だったのでしょうか。

昭和19年9月10日ニューギニアで戦死、遺骨箱には小石が入っていたそうです。

だから私は父の顔も声も知りません。

セピア色した父の若い時の写真は、着物を着てすごく太った人でした。

声は母に聞いても想像がつかない、悔しいです。

私が中学生の頃、母がぽつりと言ったことがありました。

実家の近くに森ヶ池という池がありました。今は埋め立ててなくなっていますが、ある夜空襲警報で、母は私を抱いて近所の方といっしょにその池に入ったそうです。

上からは焼夷弾が落ちてきて、池は火の海になったそうですが、私と母の所だけ火が燃えていなかったそうです。母は父が助けてくれたと思ったそうです。近所の方一人はやけどで大変なことだったそうです。

食べる物のない時代に、母は一人で私を育ててくれました。

私には想像もできない苦勞をしたでしょう。

みんなの人生を変えてしまう戦争は、二度としてはなりません。

今、私にはひ孫が2人もいて幸せです。でもそれは母の苦勞と引き換えのように思う時があります。世界の人が、戦争とは人の人生を変えてしまう悲惨なことであることをわかってほしいと思います。

竹槍で行軍の兵隊さん

あ べ さぶろう
岸和田市 安部 三郎 83歳

わたくしが生を受けたのは昭和13年1月16日、物心ついたのは母に夜中にトイレへ連れて行ってもらったことに気づいたのが初めてでした。

4歳も終わりの頃です。戦争もまったただ中、わたくしの一番上の兄が兵役で舞鶴港から満洲へ行くことになり、家族が見送りに行つての帰りに家族の誰かが腸チフス菌をうつり帰り、一番先におばあちゃんがうつり、続いてわたくしがうつり、次にいとこがうつり、続いて母が、最後に父が、チフス菌は後になるほど強く、最後にかかった父が一番先に昭和19年4月に亡くなり、続いて母が5月に亡くなり、1か月違いで両親が天国へ、とても辛い思いでした。戦争も日に日に激しくなり、空襲警報のサイレンがケタタマシク鳴り、真つ先に子どもは防空ずきんをかぶり、防空壕へ逃げ込み、B29が遠ざかるのを待つて、警報解除のサイレンで防空壕から解放されます。防空壕のカビの臭さが嫌でした。

そして昭和20年になると、わたくしは小学校へ。貝塚東尋常小学校へ、

桜が咲く春4月入学、入学してから2か月もしないうちに学校が軍隊のキャンプになったので、町単位で、堀町は牛市場の事務所の2階で、我が堀町の古川先生が担任で勉学に励みました。我が学校の兵隊さんは朝早くから規律よく隊列を組んで、横5人列で右のひとりだけが銃剣のついた鉄砲で、後の4人はなんと青竹の竹槍です。子ども心にもこれはお粗末やな…と思いました。

7月に入ると沖縄の激戦も終わり、本土への空襲が頻繁になり、特に7月19日の夜中の大阪市から大阪湾沿岸、堺泉州から和歌山市、そして海南方面、その時和歌山城も焼け落ちたので、和歌山市民が涙したとのことです。その時のB29の編隊は数知れず、岸和田、貝塚の空は火の海、家々も火の海、空からは焼夷弾が火の雨、我が町も焼けるのではと思いました。隣町とは少し田んぼで空いていたので焼けずに済みました。ホツとしました。池の高台から見ていたら、一面火の海でした。朝になり、いとこと見物に行くと、海塚の農協の倉庫がまだくすぶっていました。田んぼでは稲がだいぶん育ち、田んぼへ何発も焼夷弾が落ちて、大きな穴が生々しく、まだ焼け焦げていました。その空襲を最後に、あまりB29が飛んでこなくなりました。

そして8月に入ると、6日には新型爆弾ピカドンが広島へ、続いて9日には長崎へ、それでやっとポツダム宣言受諾で終戦、そして日本の一番長い一日、8月15日天皇陛下の詔書、ラジオが流れる音声、あまりよく

聞けなかった。午後0時、「世界の大勢と帝国の現状とに鑑み…」の天皇陛下のお言葉で終戦、子ども心に戦争が終わってホッとした思いでした。我が小学校にもアメリカの進駐軍が来て、こわいこわいと思っていたけれど、わりあいやさしくて、子どもにチョコレートをくれたりで、日本軍隊の武装解除で秋の収穫が終わった田んぼに軍隊の装備品を山積みにして火をつけて焼いていました。

21年の春、桜咲く4月に2年生で久しぶりの学校へ、男女共学になって少し恥ずかしいです。運動場の正面の奉安殿が壊されて、悲しい思いでした。

母が兄の帰還を祈る 神社参り

おおさか あつこ
東大阪市 逢坂厚子 82歳

私は小学校1年生の8月15日が終戦の時でした。学校までは約4キロメートルの道程でした。1年生の時から弁当持参でした。

家が農家だったので空腹にはならなかったです。でも米は少しで、麦の割合が多かったです。いつも野菜をたくさん入れた雑炊が主でした。

学校では1時間目が始まって本を開く途端にサイレンが鳴り、「B29だ、早く家に帰りなさい」と言つて、上の兄が教室まで迎えに来てくれました。

飛行機が見えなくなるまで田んぼの溝で身を伏せてうつむいて耐えています。服装は敵に目立ちにくい黒っぽい色でした。家の白い壁は黒の墨を塗るか、板塀を張り、敵に目立たないようにしていました。夜には、ランブに黒の布をかけていました。戦争中は肌着も少なく、シラミ、ノミもたくさん体にわきました。体のシラミは白色、頭のシラミは黒色でした。かゆくてかゆくて何事にも集中力が欠けていました。学校に行くと運動場で先生が女の子を一行に並ばせ、前から順番にDDTという殺虫剤を頭に散

布してくれました。この殺虫剤は相当きつかったのか、髪の毛がじりじりになり、傷んでいました。

学校の運動場にはサツマイモを植えていました。収穫したサツマイモは先生が蒸して、まず疎開していた家族にあげていました。

私の兄は戦争に行きました。前はビルマ、今はミャンマーと変わりました。母は、毎朝早くから近くの神社へ兄の帰還を願って日参していましたが、昭和19年7月29日に戦死の公報が来ました。遺骨だといって骨壺は帰ってきましたが、中には郷土名物の池ノ月というお菓子が入っていたそうです。母がそれを見て泣き崩れていたのを、幼いながらも泣きし泣きしたのを思い出します。

毎年8月15日の全国戦没者追悼式を見ていて、310万人が戦死したそうで、遺族の人には本当に気の毒に思います。これからは絶対に戦争のない平和な日本でありますようお願いばかりです。

私の戦争体験記

於：神戸市須磨区鷹取町

堺市 とく 匿 めい 名 80歳

太平洋戦争の終戦を迎えて早や75年の月日が過ぎて行きました。私たちが学校の授業でよく教えてもらっていた「第二次世界大戦」のことであり、昭和14年から20年までの戦いでした。そして日本は見事に負けて、降伏調印の運びとなりました。その当時は3、4歳の私ももう少しで80歳を迎えます。ですから戦争の恐ろしさや怖さもあまりわかつてはおりませんでしたが。でも親が每晚枕元に靴を置き、家の中のは外にもれないように電球に黒い布を被せて寝ていました。これはいつ空襲警報が鳴り出しても逃げられるようにするため、父が私を、母が1歳の妹をおんぶした私たち親子は、ご近所のみなさまが逃げて行かれる方向に一緒に逃げていました。そうしたある日のこと、逃げていたところから、朝、我が家に帰ってみると、びつくり、辺り一面焼け野原と化し、そこにタベまで住んでいた家や、お店なども一軒もなく焼き尽くされて灰と化していました。そして同じように逃げていたご近所の方々も、その焼け野原と化した自分たちの

大切な住居、もろもろの生活用品すべてが焼き尽くされ、灰と化していることに、誰もが言葉もなくじつと見つめているだけでした。そうした状況の中で我が家のトイレの柱一本だけがまだくすぶっていました。今でもその光景が残っています。今回この体験記を書くに当たり、「本当に書けるのかな」と思っていました。次々と私の脳裏にはつきりと思い出されてきています。

このように一夜にして焼け野原となり、何ひとつ残ってもいず、住むべき家も焼き尽くされた私たちは、父のお知り合いの方を頼って有馬に向かうこととなりました。何の荷物もなく、家族4人がお世話になることとなった所です。そこで新しい生活が始まり、ある日お米の配給を母と妹の3人で受け取りに行っていた時のこと、急に空襲警報が鳴り響き、B29が突然飛んでくるのがわかり、一秒でも早くこの場から逃げるのが大事と思っている母は、お米を道端に放り出し、他人の家の材木置き場の隙間に逃げました。でもそこには、昔田んぼの肥やしは人糞であり、その人糞を運ぶための肥たごの置き場でしたが、身を隠すことがまず第一であり、臭い汚いなどは言っておれない状況下でした。焼夷弾が落とされることから子どもを守ることにしか、母の頭にはなかつたものと思います。ただただその恐ろしい時が早く過ぎ去ることを願うことしかありませんでした。

戦争とは、自分たちが勝つために人の命も何も尊重することも忘れ、普通ならこうしたことなども考える人

も、いったん戦争となるとそんなことなどどこ吹く風と、人の心は変貌し、自分たちが今どんな恐ろしいことに関わっているのかも考えることなく、ただただ自分たちの国が勝利することのみを考えて戦っていくような時代は二度とあってはならないと思うと同時に、今の時代は一瞬にしてすべてのことが終わりとなるほどに科学は進んでおり、絶対に全世界が滅亡するようなことにならないように、戦争体験者として後世の方々に伝えたいです。

戦時下の小国民

かわかみ すみこ
堺市 川上澄子 87歳

戦時1944年8月、伯父の海軍入隊の見送りに、母の実家のある新潟に母と北陸線の夜行列車で14時間もかかって参りました。その地は民謡で歌われている「米山さん…」のふもとの寒村です。出征する伯父は実家がさみしくなるからと縁故疎開をとすすめられ、伯父は教師でもあったので、9月からの2学期に間に合うように転校とかの手続きすべてを済ませて、笑顔で出征されました。

私はそれからの1年間、肉親と離れて、教えられた小国民としての務めをがんばるようになりました。

秋は「稻刈りのあとの落穂拾い」、そして供出するための藁で縄作り。裏山に登って「松根油掘り」、戦闘機の燃料になるとか。また大雨のあとの「堤防補修の土運び」、背に籠を背負ったの土運びです。疎開児童の私たちには立ち上がれない量の土を入れられ、泣き出しそうになりながら、みながんばりました。

冬には山奥からの「炭俵運び」です。炭一俵を背負って約10キロメートルくらいの雪道を5、6年生全員が町の役場まで運びました。役場では砂糖湯1杯、湯のみ茶碗でご馳走になりました。その美味しかったこと、今でも忘れられません。

その年の冬は大雪で、実家の茅葺きの2階の窓から出入りしたこと。先生に叱られてクラス全員が雪の運動場をはだして1周走らせられたこと。悪ガキの男の子に意地悪されて先生に言いつけたら「スパイ、スパイ」とはやされて泣きそうになり、北陸線の線路づたいに大阪に帰りたいたか思った11歳の頃の私でした。

それでも私には優しい祖母もいたし、私以外の数人の関東方面からの疎開児童に比べたら教師だった伯父の関係から大事にされていたみたいでした。でも全員「小国民は戦地の兵隊さんへのことを思っただんばること」の日々の訓示を思いながら耐えられたと思います。

1945年8月15日終戦。そして8月末には出征した伯父が舞鶴より帰還し、また母が大阪より迎えに来てくれました。1年ぶりの母との再会は、嬉しい反面、すっかり田舎言葉になっていて、私は少々恥ずかしかったです。それでも母に抱かれるように新潟からまた14時間かかって大阪に帰りました。

大阪駅前には焼け野原になっていて、市電がコトコトと動いていました。

兄の写真

和泉市 さとう佐藤 こたか子 89歳

目を閉じて父を想う時、その姿は打ち寄せる日本海の荒波を打ち砕き、波しぶきを上げながら凜として揺るがぬ岩と、なぜか重なる。

祖父伝承の家業を営々と隆盛に導き、地盤を築いた父。だがそこに襲いかかった第二次大戦、続く家業の統制、さらに追い打ちをかける大阪大空襲と、次々に押し寄せる難を乗り越え、家族を守り、4人の娘を立派に嫁がせた父。頑固親父、雷親父と言われながらも、なぜか人をひきつけた大きな父。常日頃、何事にもひとり立ち向かう強い父に、私は生涯一度だけ弱さを垣間見てしまった。あれは、6月の梅雨曇りの午後、まだ5歳に満たない私に強烈な印象を残した1コマであった。

降り出した雨に走り帰った私は、何気なくのぞいた書斎の机に俯伏す父の広い背中が激しく震えているのに驚き、そつと近づき机の上にある写真を見た。その中に凜々しい特攻隊員姿の青年を見出した私は、幼心なりに見てはいけないものと、そつとその場を離れた。とは言えそこは幼い子

どもである。いつしかそのことも忘れ去った十数年後、高校進学のため取り寄せた戸籍謄本を見た私は、瞬間ガーンと頭を叩かれた思いがした。4人姉妹だけであるはずのその欄に、「長男誠一、昭和19年5月、沖縄上空にて戦死」の文字が飛び込んできた。ああ、そうだったのか！多感な年齢の私にはすごいショックだった。だが私はそのことを誰に聞くことも話すこともなく、ひとり小さな胸にそつとしまいこんだ。以来私が父を想う時、そこにはいつも軍服姿の青年がオーバーラップする。戦争がなければ、父の片腕として家業に励んだであろう彼……。たとえ異母兄であろうと、兄に生きていてほしかった。会ってわがままな妹の話を聞いてほしかった。そんな折には、兄さんに甘える友がうらやましく、横目でにらみつけたものだった。不思議に思うのは、船場の御寮人ごりょうにんさんで、おっとりしていた母が、そのことに関して驚くほど寛容だったことである。現在のように、夫の浮気不倫と騒ぐ様子もなく、平静に男の子が生まれ、家業の後継者ができた事実を受け止めていたようだ。現在では考えられない夫婦の形。それを支えるのは、男の甲斐性で2人の女性を幸せにできるといふ父の自信、あるいはその時代の男のロマンだったのか……。だが生を受けた彼の立場は……。人生は……。そこで兄はひとり悩んだのでは……。特攻隊員として、お国のためとは言え、若い身を自ら捨てに出た兄の心情を思う時、それは愛国心みの行為だったのか？もしかして、自分の出生に対する反抗、いや復讐ではなかったのか……。いや、そ

うではない、彼は父の愛を信じていたはず、それに応えて愛する人々の住む日本の国を守るため、戦ってくれたのだと、私は思いたい。

セピア色した写真でしかみえなかった兄の勇姿は、父の遺影とともに今も私のところから離れることがない。

私の父の戦争体験記

しげきよ りょうこ
八尾市 重清 良子 72歳

私の父は96歳で、福井県の片田舎に今でも元気で過ごしております。週3日デイサービスに通い、頭もまだはつきりとしています。長兄、次兄、父、妹、妹、妹の6人兄弟だったため、14歳で滋賀県の御ふ屋に丁稚奉公に出されました。遠戚だったため、親の言いつとおりに従ったそうです。

そこは人使いが荒く、14歳の子どもにはきつく、つらかったそうです。何人かの人がいいた中で、三度三度の食事の支度、三度三度の給仕もみなが終わる頃には自分も食べ終えていなければならぬ、とにかく一日中忙しい日々でした。そうこうして4年くらい働いたある日、赤紙が届いたらしく、この時に店主は、この子を今召集されたら、軍人さんに出すおふが作れなくなるから、1年待ってくれと頼み込み、1年はおふ作りに精を出していました。その間に戦争も激しくなってきた、次兄が赤紙で召集されて、今日何時何分に滋賀県のある駅を通るからと電報が入り、父は急いでその時間に向かいました。来たのは貨物列車だったとかで、その連結部に次兄

が敬礼したまま父を見つめ、涙していたそうです。列車は止まることなく、父も無言で敬礼しました。それが次兄との最後のお別れになりました。次兄はフィリピンで戦死しました。

ますます戦争が激しくなり、とうとう父にも赤紙が来て、召集されていきました。中国へ渡り、父は陸軍として第一線の一番激しい部隊に配属されて、先頭をつかさどる一番攻撃に遭いやすい所を一生懸命に司令官を守りながら、周りを注意しながら敵地に行きました。陸軍のため、攻撃に遭うとひとたまりもないらしいです。

耳の横を銃弾が飛んでゆく、仲間が倒れていく姿を見てもどうしようもなかったと、亡くなった兵士の方々を集めて、その場で穴を掘って埋めた。その時に預かった兵士の遺品を持ち帰り、戦争が終わってから、一人ひとりの遺品の住所を探し当て、返してきたとも話していました。戦争が長引くと陸軍にも食料がなくなってきた、生きるために、中国の民家にドロボーしに入ったこともあったそうです。中国の夕食時に、陸軍の兵士で大声を上げ、民家の人たちがビックリして逃げた後に、できあがった夕食を盗んだ。父の本意ではないけれども、戦争に勝つための手段だったそうです。

そうこうしている間に終戦を迎えました。父の部隊は最前線だったので、終戦を聞くのも遅かったし、中国の奥深くまで入り込んでいたので、引き戻すのに最新の注意を払い、父は一番後ろで相手が襲ってきた時の盾

になっていました。

命からがら中国から帰ってきたそうですが、兵士を運ぶ船に寄せられた時は、このまま本当に日本に帰してくれるのかという不安ばかりだったと言います。このまま捕虜として、中国のどこかに運ばれ、一生日本には帰れないかも、そんな不安の中、日本の富士山を見て日本に帰ってきたと実感。富士山つてこんなにきれいだったのか、父の心の中は安心と、日本が負けたという思いでいっぱいだったと思います。船は京都の舞鶴港に到着、港に着くまで何日かかったかは不明ですが、これでいいのか、亡くなった人たちのことを思うと自分はこれでよかったのかと悩みました。実家にたどり着いた時には、軍服はボロボロ、靴も穴が開いていて、持ち物は水筒と飯ごうだけでした。顔は汚れまくり、身体も異臭が漂っていたため、父が「お母さんただ今帰りました」と言つて敬礼しても、父の母は異様な父に怖がり、ぼう然と立ち尽くしていました。母親がどんなにか喜んで迎えてくれるかという気持ちが一瞬にしてさみしさに変わっていきました。その後父は長兄も次兄も戦争で亡くしたので、一家の後継ぎとして生計を立てて現在に至っています。

父の母も終戦日になると、仏壇の前で2人の息子を偲んで泣いていました。この話は私が父から聞いたほんの一部に過ぎません、けれど、今の若い人に戦争の怖さを知ってもらいたいと筆を執りました。

戦争と私たち家族

しばつじ あきこ
堺市 芝辻 昭子 82歳

終戦75年（父の75回忌です。）なんとなく書く気になりました。

父は34歳で終戦2週間前に赤紙1枚であのいまわしい戦争のため召集されてフィリピンに死出の旅のように出征しました。なので命日は昭和20年8月1日です。戦死しても帰ってきた時は木片だけで、本当につらかったです。本当にやさしい父でした。

母は28歳で5人の子ども、私7歳、5歳、3歳、2歳、1歳を連れて、夕方には祖母宅に妹たち2人を預けに行き、私と弟妹の3人を乳母車に押し込んで逃げてくれました。気づいた時は車輪4つともなくなっていたそうです。

私たちは堺のど真ん中に住んでいて、龍神：今で言う堺駅の方です、夜になると焼夷弾が雨あられ、花火のように落ちて（降ってきて）、焼け焦げた人たちが土居川にいっぱいでした。母は反対側の南海電車西湊駅の畑の方に逃げてくれて、私たちは生き延びました。

本当に気丈な母でした。夜が明けて祖母や妹たちと落ち合い、大美野の方の親戚を頼りに歩きました。いじめられるとも知らずに。ごはんはおろか、おかゆさんも食べさせてもらえず、あちこちの親戚をたらい回しに遭い、畑のトマトを知らない人からもらって、他人さんの親切がどれほどうれしかったことか。そんな時、母の弟が戦地から帰ってきて、母子寮を見つけてくれて、母も働きに出てくれて、少しはごはんも食べられるようになりました。

母は一生働きづめで、85歳の時、父のところへ旅立ちました。久しぶりに夫婦仲よくしてくれているでしょうか。

これからの日本、私たちの子どもや孫たちに、こんな悲惨な思いをさせないでください。国のえらい方たちにくれぐれもお願いします。

お母さん

ありがとう

今 私たち 一人かけましたが 4人は元気です

夫の戦争体験

大阪市 とく 匿 めい 名 78歳

戦争当時、夫の両親は大阪の生國魂神社の近くで薬屋を営んでいました。

父は戦争に取られ、家には、母、私7歳（小学1年生）、弟4歳の3人で、母は妊娠8か月の身重でした。大阪大空襲の昭和20年3月13日の夜、見回りの人が「早よ、逃げなあかん」と店の戸を叩きました。母はあわてていつも用意してあるものを体に巻き付け、防空頭巾をかぶって着の身着のまま私たちの手を引つ張つて外へ出ました。夜なのに明るいでした。

最寄りの防空壕へ行くと「ここはいつぱいやから入られへん」と追い出されました。途方に暮れていると、心配してくれていた親戚の人が「そんなところにいたら危ない。こつちにおいで」と腕を取り、上本町駅へ連れて行つてくれました。駅は焼け出された人であふれていました。両親とも奈良県出身なので奈良に行こうと思い、近鉄電車の最終電車に乗りました。大和高田駅に着いて生駒山脈を越えた大阪方面を見ると、真っ赤に燃えているのが見えました。

無事に親戚の家にたどり着いても、すでに父の兄家族が疎開してきていました。私たちは小屋のようなところに住ませてもらい、電気もありませんでした。母が時々泣いていたのを覚えています。

終戦前の7月頃、田んぼの畦道を歩いている時、艦載機が急降下してきました。弟は「怖い、お母ちゃん」と言って泣きました。母は「しつかり手をつないでいたら怖ない」と言って、つないでいる手に力を込めました。「3人一緒やったら死んでもええ」と母はその時腹をくくつたと、後になって聞きました。はつきりと操縦している人の顔も見えるくらい接近してきましたが、急上昇して飛んで行って見えなくなりました。操縦士も残してきた家族のことを思い出したのでしょうか、なにか温情が働いたのでしょうか、とりあえず3人も助かりました。

終戦後しばらくして父は帰ってきましたが、マラリアにかかり、やせてフラフラの体でした。養生しながら体力をつけ、その年の暮れに東大阪で薬屋を開くために上阪してきました。

東大阪へ来てからは、食料品は切符制なので量が少なく、いつもお腹が空いていました。休みになると父について買い出しによく出かけました。高安方面が多かったです。米やジャガイモに交換してもらいました。電車を降りると駅で検問があり、中身を没収されることがあって、悔しい思いをしました。当時小学1年生で小

柄でしたが、重いリュックを背負ってよく行つたな、と思います。私は長男だから親を助けないといけないと子ども心に思ったのかもしれませんが。

焼け出されて逃げる時、母とはぐれたり、また畦道で撃たれていたら、孤児になっていたか、その時に死んでいたかわかりません。戦争ほど世の中を、人間を、心を、物を、破壊するものではありません。戦争を知らない世代が日本の人口の半分以上になりました。愚かな戦争を二度と起こしてはいけないことを訴えていかないといいません。

※ジヨ・オダネル氏が撮影した「焼き場に立つ少年」が載っている新聞を切り抜いて、夫は大事に持っています。この写真は自分の姿とダブるのだと言います。夫にも10歳離れた弟がいます。弟をおんぶしてよく子守りをしたことがあつたそうです。「ひとつ間違えば自分もこのようになっていたかもしれない」と言います。戦後、孤児が靴磨きをしている姿をよく見かけました。3歳下の弟は戦争は覚えていないと言います。お父さんは戦争の話はしなかつたそうです。戦争が記憶にあるのは、夫の年代が最後かもしれませんが。

現実の戦争は、アニメや漫画のような簡単なものではないことを！切ったら血が出ることを！失つた命は生きては戻らないことを！壊れた物の再現には莫大なお金や物資や年月がいることを！それでも心は取り戻すこ

とはできません。未来を担う青年には、しっかりと正誤を見極める目を養ってほしいと思います。

夫が思い出しながら話したことを書きました。

私の戦争体験

河内長野市 とく 匿 めい 名 85歳

北九州の若松というところで、終戦を迎えました。小学1年の頃の、記憶の断片を継ぎ合せて書いてみました。

母と2人でラジオの前に正座し、玉音放送を聞きました。母は涙を流していましたが、私にはなぜ、母が涙を流しているのかわからなかったのですが、何か大変なことが起こったのだと思いました。今でも昭和天皇の声が、ゆつくりと低い声だったことを覚えています。

毎日空襲警報発令で、夜ははだか電球に黒い布をかけ、ガラス窓には黒いテープを縦、横、斜めに貼り、その上から黒い布をかけ、飛行機の爆音が聞こえなくなるまで防空頭巾をかぶり、息を潜めていました。庭の防空壕に避難して、B29が遠ざかって行くことが毎日の繰り返しでした。ときどき親は竹槍の訓練で出かけ、兄は学徒動員で出かけ、留守でした。そんな時に空襲警報発令のサイレンが鳴り、私は弟2人を連れて（下の弟は2歳でした）、おんぶをして逃げる時にすごい爆音がして、B29に乗った人が見

えるくらい低空で飛んできましたが、私たちが子どもとわかつたのか、遠ざかっていきました。

家には3発の焼夷弾が落とされていました。焼夷弾は、屋根は突き抜けるけれど、天井板で止まって火事になるので、どこの家も天井板をぶち抜いていました。確かに焼夷弾は下まで落ちて、家中に煙が立ち込めていたらしいのですが、家の隣が小学校で、兵隊さんが大勢おり、その人たちが消してくれたそうです。おかげで全焼せずに済みました。

後々聞いたことですが、近くに鉄工所があり、軍需工場だったのか、原子爆弾を落とすはずが、その日は九州は天候不良で落としてもさほど威力がないとのことで、広島に落としたように聞きました。戦争が終わってから田舎に短期間疎開をしていたのですが、父はサラリーマンで、給料をもらっても食料も物資もなく、ひもじい生活をしていました。ときどき母は弟をおんぶして、ねんねこを着て、電車で食料の買い出しに行っていました。母の背中と弟の間にお米をかくし、ねんねこを着てやっと駅まで来た時に、母の背中で、お米が痛いと思いが泣き出し、母はもう少し大声で泣いてもらおうと、弟の足をつねって泣かせたら、うるさいと思いたのか、検問の人が首をちよつと横に振って、早く行けと言わんばかりに通してもらい、没収されずに済んだそうです。そこまでしても、夕食はいもとか野菜の方が多く炊いてあるものでした。今ではダイエット食にもつ

ていすね。

早くこの地球上で戦争がなくなる日に来てほしいものです。

私の戦争体験

東大阪市 だん男 せい性 90歳

■ B 29 撃墜

サーチライトに照らされ悠々と飛ぶ B 29 に高射砲の弾が命中、火の玉となって落ちていった、どこからともなく「バンザイ」の声が聞こえた。夜が明けて高井田付近に落ちたと聞き、自転車で走った。畑の中に散乱する機体の大きさに驚いた。そばに米兵の遺体が転がっていて、群衆が足で蹴り棒で叩いていた。やがて警官が来てそれを阻止した。

平常では考えられない光景で、明日の命がわからない状況になると心が鬼になる、それが戦争そのもののおぞましさと悲しさである。

■ 爆弾攻撃

連日連夜の空襲で、心身の疲労度は極限に達していた。8月14日昼ごろより約2時間、森ノ宮の砲兵工廠が爆撃破壊された。現 O B P (大阪ビジネスパーク)、今は立派なビジネス街になり、戦中の面影はない。近くの京橋

駅に爆弾が直撃、避難していた多くの人々が犠牲になり、毎年この日に慰霊祭が行われている。

この爆撃の時、我が家の近くに爆弾が落ち、その時自転車で通りかけた男性と向かいの工場主が吹き飛ばされ死亡。防空壕内で体が浮き上がり、隣りの人の上に転がり落ちた。天井から土がバラバラと落ちてきた。家の屋根瓦は鶏が毛を逆立て喧嘩するごとく、パーと立ち、そのままズルズルと落ちた。この時はもう駄目だと死を覚悟した。頭を下げ耐えていると、しばらくして静かになり、壕の外に出てみると、近くに直径7〜8メートル程の大きな穴があいていた。家の被害状況を調べに入ったら、天井はぶら下がり、家財は散乱、畳に爆弾の破片が突き刺さっていた。ザーザーと百雷が一度に落ちるような不気味な音と地響きは、身に染みているのか、今でも何かの拍子に思い出し身震いする。空は夕暮れのように暗く、やがて黒い雨が降ってきた。

戦争の悲惨さ知らぬ政治屋たちが、国を守るのに必要と、数の力で押し切って、戦争のできる法案を可決する。いかなる理由があっても戦争は絶対に起こしてはなりません。いつも何も知らない私たちが犠牲になります。

■大阪大空襲

昭和20年3月13日未明、B29の空襲で大阪市内中心部が攻撃され焼き尽くされた。壊れた水道管から水が流

れ、涙を流しながら自宅のあった辺りを掘り起こす人が見られ、多くの生命財産が一瞬にして失われた。

大阪市内に住んでいて、近くの住宅に焼夷弾が落ち、火が噴出した。水でぬらした火叩き（棒の先に荒縄を結び付けた物）で叩いて消す、バケツリレーでの消火訓練は、雨あられのごとく降り注ぐ爆弾、焼夷弾から身を守り、逃げ惑うので精いっぱい、必死になって行ってきた、防火訓練は何の役にも立たなかった。

戦中戦後のわが家

堺市 チャーリーさん 82歳

終戦の年の10月に父は32歳の若さで病死、私は7歳。黄疸で亡くなった。父の病院に母と行くと、父の顔は黄色くやせていた。戦地で病気になり、帰国。今の世の中だったら助かっていたかも知れず、若くして天国に行っていた父。

それから後の生活は、母が働きに出て、私と弟は祖母に育てられました。苦しい生活の中でも、祖母は、近くの農家の方の畑で掘り返した後のじやがいも畑に入らせていただき、小さなくずいもを私と二人で拾って帰り、料理を作ってくれ、ひもじい思いもせずにながらばれました。

戦争が終わり頃になった時は食べる物がなく、雑炊を買いに小さな私も鍋を持ち、長い列に並び、自分の番が来た時に私の前で売り切れになり、トボトボと帰ったことを今もハッキリと思い出します。母が三宮で小さな雑貨の店を開きました。買いに来られる方のために、仕入れの手助けで祖母と一緒に朝早くから買い出しに並び、小さな体に大きな荷物を持ち、一

生懸命がんばったことを今もハッキリと覚えています。

食べ物がないときに育った私は、今の世の中の食品ロスのことはとても考えられません。日本は今、なんでもお金を出せば手に入る国、世界では戦争もまだあり、小さな子どもが食べ物もなくひもじい思いをしている。ニュースを見ると思い出します。

物を大切に、ロスを作らないように、日頃から努力をがんばっています。地球上の国が平和になるよう祈る毎日です。

場所 兵庫県の深江付近

私の満州

河内長野市 に う ゆきみ 丹生 幸美 89歳

私の生まれ育った所は、旧満州国奉天省本溪湖市（現在の中国東北遼寧省本溪市）で、私の家は、日露戦争の直後、曾祖父が徳島の田舎から大陸へ渡り、ハルビンハル濱・大連、祖父の代には本溪湖で商売をして、満鉄へ物品を納入し、財を築いた。亡父も満州生まれ、長春商業を卒業した。

私は、満州事変の最中、昭和6年に生まれ、幼年時代は何ひとつ不自由なく伸び伸びと育った。戦時中でも満州はのんびりしていて、国民学校5年の修学旅行は旅順・大連、6年は新京・ハルビンハル濱だった。昭和19年本溪湖女学校へ入学、戦時色は濃くなってきたが、農作業や防空壕掘りの間に授業があった。20年になると1、2年生は地元の製鉄所へ、3、4年生は親元を離れ遼陽の軍需工場へ動員されたが、日本の勝利を信じ、「撃ちてし止まむ」「欲しがりません勝つまでは」と大和撫子・銃後の乙女として黙々と働いていた。その頃40歳くらいの男性には軒並みに召集令状がきた。私の父にも5月初め赤紙が来た。母は、末妹出産後、結核性腹膜炎にかかり、

内地徳島で療養していたが、父の応召で祖母と子どもたちだけになった私たちの所へ3歳になった妹を連れて帰満した。父の出征に間に合わず、牡丹江の奥の虎林の部隊にいた父に面会に行った。

8月8日ソ連の宣戦布告、王道楽土の満州は戦場と化し、ソ連機の来襲も始まった。8月15日は北満からの避難民たちの炊き出しに動員され、玉音放送も知らず、帰校して敗戦を知り、呆然とした。敗戦時北鮮にいた父は、部隊長の英断による現地解散のおかげで捕虜にならず帰宅した。9月に入るとソ連軍がやってきた。シベリアの囚人部隊で女の人を襲ったり、物品を盗ったりした。ソ連軍が去り、中国八路軍が進駐、規律は厳しく、無秩序でなくなるが、民衆裁判が始まり、同級生の父上の税務署長・警察署長等、ちまたの庶民の長に過ぎない日本人が何人も銃殺された。父も人民の利益を搾取した罪で牢につながれ、財産没収で住宅や40軒の家作は取られ、与えられた3畳で家族6人が引き揚げまで暮らし、私は支那街へ饅頭売りに行き稼いだ。

八路軍と政府軍との市街戦、八路軍の敗走、昭和21年5月から引き揚げが始まり、私たち一家は9月の第9次の引き揚げで、すべての財を捨て、ひとり千円と自分で持ち運びできる所持品をリュックに詰め、本溪湖を後に無蓋車に詰め込まれ、奉天収容所、錦州収容所、いずれも土間に一枚のアンペラを敷いて、家族が詰め合い、並んで寝た。奉天から錦州に向かう折、一晚中豪雨に遭い、腰まで水につかった母は、高熱を出し、歩けなくなっ

た。満州を墳墓の地と決めていた祖母も気落ちと栄養失調で歩けず、葫蘆島で母と祖母は担架に乗せられての乗船で父が付き添った。私は8歳の弟と3歳の妹を連れ3人で乗船した。本溪湖を出発して2か月あまり、やつと佐世保の港に着き、四国高松から阿波池田へ、祖母は帰りついて3日目に亡くなった。引き揚げ後苦労を重ねた母は49歳の若さでこの世を去った。

私の戦争体験

ひまや ねん
河内長野市 暇家 稔 87歳

私は昭和16年4月国民学校に入学した。同年12月8日、突然「大東亜戦争」に突入した。年明けた17年には、勝利、陥落で、1年が過ぎた。18年には、少し陰りが出て、浮いた気もなかった。19年に急に「学童疎開」が突然実施された。縁故のない我家は、「学童集団疎開組」に入った。

19年6月中旬に、大阪駅を朝3時に発車、1時間ほど走った、神戸だ、窓を開けて神戸市街地を見ていたら、先生に「灯火管制なのだ」としかられ、殴られた。

四国の志度町に、午後4時に着いた。宿舎は寺で、生徒男女50人が大広間、男女が差し向かいで寝床を取る。

戦況はますます厳しく、戦場撤退も報じられた。

四国の田舎にも、艦載機が飛来してきた（P51）。昭和20年3月、東京が空襲、3日後に大阪も大空襲、順次地方都市を空爆、高松も焼かれ、黒い顔した焼け出された人々が志度にも現れた。この頃から「学童脱走」が

多くなつた。親恋し（無理もない、10歳、この先何年続くやら）、脱走してもみな高松港で捕まる。「コソ泥事件」が多く発覚した。野菜類・生り物は年中のこと、春はトマト、胡瓜、夏は西瓜（と間違えて「干瓢瓜」を、秋は渋柿を取り、寝床に入れて蒸すと熟す、また稲穂を盗み、茶瓶で飯を炊くなどを行う、だって何しろ腹が減るもの仕方がない。

8月に入り、広島に「新型爆弾」、3日後には、長崎にも落ちた。と、1週間ほど経つた15日に「玉音放送」があるとのことで、寺の境内にラジオを置いて、先生、生徒全員が聞いた。何やらわからないが、女先生が泣き出した。どこからともなく「戦争は終わった」の声。（だが負けたとは、聞けなかった。）

15日その日は「嫌に」天気がよかつた。数日後から、天気予報の放送もしだした。

戦争が終われば、家に帰れる嬉しさで、夜、眠れない日があつた。みなも、一緒だ。終戦より2か月、帰れる日が決まつた。みな喜びは、一晚中続いた。（品物はないが）欲しい物大会だ。帰る日の前夜は誰も寝ない。

帰る当日は、汽車で高松へ。連絡船（来る時は乗車のままだった）が、今日は徒歩乗船だ。宇野も過ぎ、姫路も通過、神戸にきた。街はみな焼け野原だ。誰かが言った、「大阪が見える」と。見えないが、みな焼け野原だ。大阪に着いた。また、誰かが叫んだ、「高島屋が見える」。それほど御堂筋も焼け野原だ。ところどころにビル

が残っているだけ。学校に着いた（学校はコンクリで無事）、父兄たちが迎えに来て帰宅した。5か目に登校すると、同級生5人が学校で寝泊まりしているという。聞くに、家が戦災で焼け、親は焼死、まったくの「戦災孤児」だ。日が経つにつれ、ひとり減り、またひとり減り、5人いなくなるのに10日もかからなかった。

1年ほど経って、同級生の父親が彼らを見たとき、大阪駅で靴磨きをしているという。彼らが本当の「戦災孤児」だ。弾は見えないが、戦争体験だった。

私の子ども時代

東大阪市 や の たみえ 矢野民江 90歳

私は昭和13年大阪市西区九条第三小学校に入学し、昭和19年九条中国国民学校を卒業した（学校は大空襲で焼失し、公園になっている）。当時は集団疎開か縁故疎開で小学生は市内にすることができず、母は私以外の弟や妹を連れて父母の里、現在岡山県笠岡市の瀬戸の小島に疎開することになった。当時大阪市内立東高等女学校に合格していた私は、父と大阪に残ることになった。

食料は人数に応じて配給はあったが少量で、何をどのように料理するかわからず、隣家でたずねて何とか食べていた。ガスもなく七輪でバタバタしていた（戦中は少量でも配給があったが、戦後は配給もなくヤミ市ができた）。

今のように洗濯機も洗剤もなく、父の大きな下着など、小さな手でどのようにして洗ったのか覚えていない。

通学途中警報が鳴るとその場に止まり、解除になると学校へ。空襲警報

になると帰宅する。勉強らしい勉強はできなかつた。上級生は学徒動員で工場へ、1年生は出征兵士の留守宅へ勤労奉仕として動員され、初めて田植えを手伝った。蛭に食いつかれ、田の畦を「キャキャ」と言いながら駆け回ったことを思い出す。

何とか一年間通学し、春休みには母の待つ笠岡に帰ろうと準備していた3月16日、大阪大空襲である。遠くで焼夷弾がパラパラと落下するのを花火のように眺めていたが、だんだん近づき、家屋疎開後の空き地へ（九条新道近く）。近所の人と防空頭巾のみで逃げた。すぐ解除になると思つたのか、面倒と思つたのか、そこが子ども、せっかく用意してあつた成績表、制服、写真など、何も持たず、また塚に埋めもせず、着の身着のまま逃げた。父は消火のため残つたが、後で会うことができ、家の丸焼けを知らされた。夜明けとともに焼け野原となつた光景が目に入った。大阪に住めなくなり、死体の転がる中、転校手続きのため本町の学校まで歩いた。そして友人にも担任にも会うことなく転校した。

昭和20年4月、岡山県立笠岡高等女学校に転校した。学校には疎開者や引き揚げ者など多く、引き揚げ者の中には丸坊主の人もいた。転校はしたが、家から通えず下宿し自炊した。友人は農家が多く、白米のお弁当だが、私は粗末な物で弁当箱のふたで隠して食べていた。

学用品がないので何も持たずに登校したら、担任が大学ノートを2冊くださった。表から国語、裏から数学、中央の右側に地理、左側を歴史というように、1冊を何通りにも使った。ありがたかった。

転校して初めての夏休み、家に帰っていた8月6日広島に、9日長崎に原子爆弾が落ちた。今度は笠岡が空襲されるとデマが飛んだ。

二度と焼かれないう、次の疎開地へリヤカーで運ぶ途中、ラジオが聞こえてきたが、何を言っているのか聞きとれなかったが、それが玉音放送だった。

あれから75年、3月と8月は私の忌月である。今でも戦火に追われて難民キャンプに避難している子どもたちの姿をテレビで観る時、昔の自分を思い出す。生きた証しとして書き残すことにした。

永遠の平和を。

私の戦争体験

やまわき ひでこ
泉佐野市 山脇 秀子 76歳

私は生まれて3か月余りの乳飲み子、兄は2歳でした。大正区鶴町に、祖母と母と4人で暮らしていました。

父は昭和19年5月頃徴兵され、和歌山の部隊へ。昭和20年3月30日、大阪大空襲で裏の家まで火の手が回り、小さい子がいるのでこのまま逃げなくてもと言っていました。怖くなって、祖母が腰ひもをほどこき、兄をおんぶして、私は母に抱かれて、とりあえず父の実家、中島町へ。そこでも空襲が収まらず、防空壕へ。小さな子どもが泣くと周りから出て行けと言われ、怖かったけれど、みんな気が立っていたから仕方ない、と。

祖母は自分の実家の九州、大分へ帰る決断をしました。次の日から母は貨物の手配と切符を買うため、大阪駅へ。帰って来るまで、空襲のために、中島へ帰るまで4日かかったそうです。途中、淀川大橋の上で爆弾の落ちた穴に足を取られたり、はいていたゲタが片方見つからず、あきらめてはだしで歩き、祖母は母が死んだと思ったらしいです。その後、荷物を貨車

に積んで大分へ向かいました。途中何度も空襲に遭い、その度に列車が止まり、乗ったり降りたり繰り返す。兄はお腹がすいたのかよく泣いたそうです。列車の中で乗り合わせた兵隊さんが、自分の持っていた缶詰や食べ物を与え、兵隊さんはこれから部隊に入れば食べられるから、と言っていたそうで、祖母と母は本当に神さまみたい、と思っただけです。

大分に帰っても空襲はありましたが、ちょうど終戦の1か月前にたどり着いたそうです。その後、別府に飛行機からビラが大量にまかれ、温泉地なのでアメリカ軍の保養所にするためだと、住民たちは言っていたそうです。

父は昭和23年に1枚の紙切れだけでフィリピンのルソン島で戦死したと公報が来ました。父は私がお腹の中にいたのは知っていました。兄と2人だけの子どもには、できるだけ教育を受けさせるようにと、今から考えると遺言だなと思います。

この話は、祖母がいつも私に話して聞かせてくれた、いつまでも忘れることができない思い出です。私は父の顔も写真でしか知らないのです、今まで一度だけ夢を見たけれど顔だけは黒く、この人が父なのかと思っただけです。戦争はたくさんの人たちの運命を変え、苦労の連続だと思っています。平和な世の中が続くことを祈っています、今はコロナウイルスで、また、災害が多く、心が痛みます。

2020 年度
戦争体験＋プラス

88才、平和はありがたいと 思う毎日、ずっと続いてと願う!

泉大津市 匿名希望 88歳

私は、昭和7年（1932年）2月生まれ、父母と姉と妹3人姉妹の次女でした。戦時中は、天王寺区に住み、国民学校から高等女学校に進みましたが、学徒動員があり退学、安治川の日本石油の事務員になりました。

6月1日、勤め先の安治川近辺の空襲のため学徒動員の多くの学生が負傷しました。私たちは、できる限り、学生の手当をしましたが、安治川に飛び込む学生も多く、川は水面が見えないくらいの人々が息絶えていました。むごい光景は、今も頭に焼きついています。その日、電車が止まり、安治川から鶴橋まで線路を歩いて帰りました。

私たち家族は、空襲で防空壕に入ったり出たりの日々でした。とうとう家が焼けました。逃げる道は両方が火の海、防空用水に衣服を浸けても火柱の勢いで、妹は母の背中をやけどし、私は、気がつけば裸足でした。家が焼けない人もありませんでしたが、うらやましくはなく、何日か後に同じ目に合うと思うばかりでした。

それからは、知り合いの家を転々とし、食べるものもなく、母と姉が着物と食べ物と交換に遠くの農家で通いました。でも帰りの何回かは、鶴橋あたりで警官に没収され徒労に終わり、悲しい思いをしたと母に聞きました。

昭和20年1月、母が明日入院するという前日に亡くなりました。まだ40才にもなっていない年令でした。神崎川の川岸で木を組み、野焼きで見送らなければなりませんでした。悲しみの中、父を中心に支え合いながら今日まで生きてきました。

住居は、大阪音楽大学の隣に建っていた、マンションでした。外人の建てた古い物でしたが、水洗トイレもあり、大学からはピアノやバイオリンの音が聞こえるいい所でした。

8月15日に終戦。地獄を見ているので、もう怖いものはないと思いました。

今、88才になり、これからは一日一日大切に平和をありがたく思い、ずっと続いてと願っています。そのために、平和憲法は守らなければならないとの思いが強いです。

二度とあってはならない戦争は、イヤです。特に若い人たちに知ってほしいとの思いでお話しさせていた
だきました。

さん がつ とお か どう きょう だい くう
三月十日 東京大空しゅう

堺市 匿名希望 81歳

3月10日 東京大空しゅう

姉が9才 亡くなりました 私は5才です

東京としまくすがも5丁目1041番地

私は今年81才です

姉がぼう空ごうの中でかくれていて

亡くなりました 姉の骨はそのままです

私は兄と両親と姉でした

汽車にのって福岡県の嘉穂郡の内野に行きました

食べものもなく大変でした

内野に行けば家があったので

おじいちゃんが政治かだったので

山内かく三郎です

文がへたなので この辺で失礼します

すす ほのお 煤と炎

あい だ すみ こ
松原市 相田 澄子 94歳

大正14年8月4日、大阪市浪速区芦原町で、心臓弁膜欠損の奇形児として、わては誕生した。満年齢は、昭和の年号と同一の本年94歳の老婆です。まあ何と、16歳の思春期より、20歳の青春期までの生死を分けた苦悩の思い出を、いまだ引きずっているのです。では一つずつ綴ってみましょう。

昭和16年12月8日は、大阪は好天。わては、電話局の交換手でした。今朝出勤前のラヂオで、アナウンサーの引きつる声が、忘れられません。

「本日3時19分、ハワイ真珠湾のアメリカ太平洋主力部隊を攻撃して、トラトラトラの成功電を打つ。」

電話局の廊下で出番を待つわては、本当に恐怖で身震いした。やがて同僚たちも揃った。全員若き乙女たちである。長い中国との戦争で街の銭湯もなく、石鹸も無いので、全員が虱を飼っている。

わては昭和18年、近所の人の紹介で軍需会社の出張所に転職した。本社は有名な大会社である。わての給料は、電話局の倍で、一か月40円ですが、街の店

屋は閉まっけていて商品は見当たらず、母に生活費を渡し残金は郵便局の貯金です。

わたの仕事は会計係で翌日2千円の大金を預かる。小さな金庫もない。帳簿は家庭用の金銭出納帳だ。ある日肥満体の老人が現れて、所長はこの人に、400円を支払うように指示する。すぐわたしは気付いた。世に言うところの闇商人のようだ。この人の領収証にH鋼何トンとありました。この大金の領収証は、何と机上の札差しピンに差し込むだけです。また多くの業者の出入りがあり、業者の接待で、夕方中華料理店で宴会があり大皿の料理の数々に、美酒も添えてあった。最近目ばかり光って、人々は飢えてる筈だ。

昭和20年3月13日、待っていたように空襲警報が鳴る。けたたましく鳴る。妹と母は連れて近くの大浪橋の橋下へ避難した。わたしは何事もすることが遅く間に合わない。表へ出たら、右からけたたましい蹄の音。二頭の馬が狂ったように、左の大火焰の中へ走って行った。B-29の爆音は地上を押し焼夷弾が続々と落下して、炎は立ち上る。わたしは息苦しい。わたしは孤独。しかし幸いなことに我が家の前は、女学校のコンクリート塀である。焰の挟撃にならず、助かった。近づいて来た世話人は父であった。お互い鼻の下に真黒な煤のひげを生やしてる。避難所で家族と再会。誰もわたしを案じる様子はなかった。翌日は昼頃にやっと薄い陽光に会う。戸板で運ばれる全ての骸は首や手足無く、胴内は空洞であった。何と人の死体の物めいて、無情な一瞥で見送られることよ。命も物も奪う戦争の無惨。

軍隊は生と死 紙一重の運隊

堺市 市川光 94歳

日本には世界に誇るすばらしい憲法を、改悪しようとする政府の流れの中、過去の戦争によって多くの人たちが愛別離苦し、又アメリカ軍の本土空襲で焦土化した悲惨な状況を多くの若者に知っていただきたいと思う一人であります。

支那事変の長期化の様相に従い大阪連隊からたまたま帰宅した兄と、朝日新聞社大阪本社の速記者勤務の姉が戦地からの便りに、わが家独自の暗号を作っておき、黄色く濁った広い河は中国から、凍りついた河で流れが見えないは（旧）満州から、と言うように話し合った事を覚えております。

1941年12月8日太平洋戦争が勃発し、日本では勉強よりも軍需工場での仕事を最優先される時代で、私も堺の某軍需工場で60馬力エンジンの製造に従事している時に、1944年9月5日船舶工兵第九連隊補充隊に入隊の赤紙がきました。父親からつねづね軍隊は運隊であると言い聞

かされ、私の運隊の始まりを覚悟いたしました。

ある日突然班長と共に小隊長に呼び出され、昭和19年10月5日をもって船舶通信隊補充隊に分遣を命じられ、これが第1回目の運隊であります。日夜モールス信号の特訓に明け暮れる毎日。昭和20年1月のある夜、非常呼集のラッパと共に全隊員が広場に集合。一列縦隊の指示のあと、前から順に一、二、三の番号で偶数番号は右へ、奇数番号は左へ整列、後でわかった事ですが偶数の者は中国へ、奇数の方は南方作戦へ別れるための整列であったのです。

しかし、奇数の方は南方の現地に到着するまでにアメリカ軍の魚雷をうけて輸送船もろとも台湾沖で全員戦死したとのことでした。これが『生と死の分かれ道』第2回目の運隊でした。

1945年4月29日から上海附近で輸送並びに教育訓練に従事、その間まさか自分が内地で製作したエンジン部品その物が日本から離れた上海での教育課程で扱うとは本当に偶然で、上官のエンジン教育の際、よくできた私が目にとまる良い機会でもありました。これが第3回目の運隊です。

そしていよいよ私の待ちに待った速記術をいかせる情報係の任務を命じられる時がやってきました。〃〇〇月〇〇日より連隊長付情報係を命ず、と正式に本部から伝達を受け、朝夜の点呼及び各当番勤務も

なく、毎日無線機を前に朝7時、正午、午後3時、7時、夜9時の一日5回連隊長室へ直接情報資料の提出をいたしました。これが第4回目の運隊であります。

戦況は日本軍にとって不利で制空権、制海権を失い、特攻作戦もやむなく、若者たちが死に向かつて出撃して行く様子を連隊長にどう報告すればよいのか迷う毎日。大本營の虚勢の発表をそのまま報告すれば実際と嘘の報告になり、敗退の事実を報告すれば連隊長からどんな言葉がかえってきたものか？

私にとっては命がけの報告でした。多くの若者たちが散っていったこれが日本軍の断末魔の戦術であり、戦争によって苦しみだけが残る歴史を風化させないために平和がどんなに尊いものか後世に伝えたいと思います。

私の戦争体験

和泉市 岡村路代 79歳

私は昭和16年1月26日生まれです。生まれた年に父が戦争にいき、全然父の顔もわからず、母は困ったらしいです。

母に聞いた話ですが、町内の人たちは、皆おめでとう、「バンザイ」「バンザイ」と言っていたが、母は心が悲しくて心の中で泣いていたらしいです。何故子も小さいのに、召集されていくのに、おめでたいのかと、心の葛藤がすごくあったと、今と時代が違う事が、ありありとわかります。

家の庭に防空壕があり、そこにB-29が飛んできたら、皆入りにきます。土で作られたものです。下にワラを敷き、皆身をかくすのです。

食べるものもなく、草を取りにいたりして食べ、全部配給で、好きなものは食べられず、店屋もなく、栄養失調でなくなる人もおりました。どうして生きてきたか、わかりません。まだ小さいので、時代がどうであるかも、わからず生きてきました。

現代の人たちには、とうてい、生きていられないでしょうね。

私の父は運よく昭和20年に終戦になり、帰ってきました。私が4才で、全然父の顔を知らないから、毎日近所の家でいてたのです。こわい顔したおっちゃんや、家にきてると。父が手をつなぎにきたら、ふり払いにげまわっていたと。だいつの月日がたつてから、慣れたそうです。戦争は、なにもかもなくしてしまうから、大変です。

今なんでもある時代、私たちの子ども頃はなにもなく、自分で遊ぶ事をおかんがえて、したものでした。交通も便利でなく、小さいのに母の実家まで歩いて行ったものです。駅でいったら、3駅くらいの距離です。今みたいに、水道をひねったら水が出るが、井戸水で、食べもの、風呂、皆ツルベを使って水をくむのです。私たちも、井戸水を、家から離れた所から、タンゴに入れて、家まで運び入れるのです。毎日が大変でした。外へ出る時は、いつも防火ズキンをきます。頭から首まで、綿の入ったものを母が作ってくれたのを、いつもつけます。

家族がひとつにまとまっていたように思います。電話もなく、私が小学校ぐらいで一軒くらいでした。電話が各家につき出したのは、私が18才ぐらいでした。今の人たちには、考えられない時代でしたね。

私の戦争体験

河内長野市 奥河正子 84歳

私の生まれたのは、大阪市西区の本田町、幼稚園から国民学校へと、まだ平和だった町に、馬が足音を響かせて荷車を引いて通っていたのを憶えている。

4年生の時、戦争が激しくなり、空襲のサイレンの音が昼夜を問わず響き、学校から急いで外に出る時、校門のところでその日の給食のコツペパンを一つずつ受け取り、「気を付けて帰って！」と言う先生方の声が、今も耳に残っている。

3月の大空襲で家は丸焼けとなり、焼け跡にはあちらこちらに水道管だけが立ち残っていて、付近は全く焼野原と化していた。

はるか彼方に高島屋の建物が見えた。いつもは電車で行く遠い所だと思っていたので、「高島屋が見えるよ！」と母に叫んだ。

夜、焼夷弾がパラパラとまるで花火のように降りそそぎ、あちらこちらから火の手が上った。「逃げて下さい！」と切迫した大声と共に、各戸か

ら人々が集まり、防空ずきんをかぶり、灯下管制で暗闇の中、月明かりを助けに、川沿いを大きな行列と
なって避難した。その人波の中に、おじいさんを乗せた担架を、前後女の人が持って運んでいる人たちが
いた。そのおじいさんが、担架の上で、弱々しく片手を左右に動かして何か言っている様子だったが、か
き消された様にわからなかった。その姿がいつも心に残っていたが、大人になってやっと解った。あの
時「自分はもういいから置いて逃げる」と二人の女性に言っていたのだと。その後どうなったのか
は、知る由もない。

一夜が明けて、皆憔悴した顔で、避難所から三々五々散るように立ち去って行った。

電車通りの横の、歩道に掘られていた防空壕の上に、トタン板が置かれ、その上の中で焼け死んだ人を
吊う花が置かれていて、その横を、人々が通り過ぎていた。

何事も無かったかの光景が、今思い出すたびにやるせない思いがする。

夏の思い出

松原市 谷アサ子 79歳

毎年巡ってくる8月、それは暑いだけでなく、私にとって戦争や原爆を思い起こす悲しい季節です。

私は昭和16年生まれなので、戦争そのものを体験した年齢ではありません。ただ、子どもながら、飛行機を見れば、「お母さんまたB-29が飛んでいる」と、知らせに行ったものです。近くの山へ遊びに行ったとき、母が血相を変えて「女の子が一人で出たらいけん、アメリカの兵隊さんが連れて行くけん」と、力づくで家に連れて帰りました。

夜は電球に風呂敷をかぶせ、かすかな灯りの下で母が本を読んでもくれました。爆弾は明かりを目がけて落とされると聞いていたので、私にとっては安心できる嬉しいひとときでした。

ある日母が、パイナップルの缶詰をもらって帰りました。食べた事は無くても、丸あるい、黄色な、甘酸っぱいパイナップルは、何となく想像できました。わくわくしながら手元を見つめると、それは、汁だけの缶詰

でした。それでも母は喜ばせたかったのか、「パイナップルはアメリカ人が食ったけん、日本人は汁だけだども、うまいでエ」と言い、がっかりどころか、甘くて美味しい汁でした。

その頃、都会からたくさんさんの疎開の人たちが来て、農家の離れや、納屋を借りて住んでいました。もの珍しさにそ〜っと覗きに行くと、「これあげるから薪を取って来て！その代わりこれあげるさかい！」と、母にはとても買ってもらった事のないチュウインガム。嬉しさのあまりそれにつられて、子どもにも登れるゆるやかな崖に登り枯れ松葉の枝をたくさん背負っては、何度も何度も運びました。雑炊を作るため、七輪に火をおこすためのものでした。

そのうち「あんたはほんまにええ子やなあ」と言われるようになり、ご褒美のお菓子を目当てに、毎日頑張った記憶があります。それでも子どもが一日のおやつにするには足りるはずもなく、道端に生えている、のぼし、しんざい、いたどり、しいの実、桑の実等、たくさん食べました。砂糖壺から盗んだ小さな指の痕跡はすぐ母に見つかり、叱られたものですが（あの頃の甘味料はサッカリン）、塩はなぜか怒られる事がなかったので、そのうち、草を塩味でしがむものも結構美味しいおやつになりました。

ある日戦地ボルネオへ行ってた義兄が突然帰って来ました。ただ、一緒に過ごす事もなく離れの部屋へ

隔離。母からは、「マラリアがうつるけん、近づいたらいけん」と叱られ、それでも見たい子どもの私は、指をなめ、障子に小さな穴を開け、苦しそうに横たわる義兄を見ました。戦争という事は理解できなかったけど、子どもの目で見たら恐ろしい現実でした。

後年、孫たちに「おばあちゃんが子どもの頃は、チョコレートも、ケーキも無かったから、草をいっぱい食べたよ。だから今でも食べれる草と、そうでない草はすぐ見分けられるよ」と言ったら、「ハイ、おばあちゃん草食べてたん？人間なのに」。絶句。平和な時代の会話でした。子どもや孫たちの時代、そしてこれから先もずっとずっと戦争のない平和な世の中でありませうように、心から願ってやみません。

大阪大空襲の夜

岸和田市 鶴保 巍 95歳

来たる4月1日、八日市航空隊への召集令状がきた。職場の先輩、亀井さんの手配で、中座裏の小路の酒場で設計部の歓送会を受けた。三軒家へ帰宅、ぐっすり寝込み最初の空襲は知らなかった。

表の騒がしさに目覚めると、ガラス戸が真っ赤だ。耳を圧する爆音に、すわとはね起きる「空襲だー」。バケツを叩いて長屋前を走り廻るが、誰ももらぬ。すでに近所の人は早々に逃げ出して誰もいない。二階の物干しから大屋根へ上がり棟にまたがる。

尻無川をはさんで西の港区の上を大型の米機が次々と市内に向けて飛び続けている。空一面にキラキラ落ちてくるのは焼夷弾か。何よりも東三軒家がメラメラ燃えている。泉尾も同じだ。俺が寝込んでいる間に落とされた焼夷弾だろう。市電道の向こうだが存分に焼かれた軒が火の粉を散らしながら焼け落ちる様子は初めての風景だ。田舎の祖母が病気で、両親が帰省し、今夜わが家は俺一人だ。

一時程も屋根にいたが、鶴町の彼女の事が心配になってきた。炊事場へ降り、弁当を数人分作った。さて三軒家の南、泉尾警察前まで来たが、それまで電車をへだて別々に燃えていた火が、あいにく合体した。後に尻無川堤防へ廻ればよかったと思っただが、無謀にも燃えさかる火の中へ飛び込んだ。幸い眉を焼いた程度で、向こう側へ抜けた。そこに大運橋先の工員らが3、4人集まっていた。水、ぶっかぶれと言いき、さらに走ったが、もう火はなかった。彼女は頼に土をつけていたが、元気だった。

その借家は今も残っています。もちろん、別の方が買い取っていますが。



私の戦争体験

河内長野市 長澤英一郎 78歳

戦争ってだれが考えたんだろう。昔々の稲作が日本で始まった頃だそうですね。昭和20年8月6日広島に原爆が落ちたのは私、まだ3才と2か月。父が興奮気味に話している母のそばにいた私は、それを聞いて今も覚えていて。父は海軍の舞鶴工廠の上官として務めていたらしい。母にはよくなんでそんな事覚えてるん？と言われたが。

バクダンにまだ名が無い。ピカドン、新聞に載ったバクダンの名。地方新聞それもガリバン刷りのような新聞にのっていた。ピカドンで広島は一人も生きていないなんて話を父は母に話していた。官舎にも空襲報が度々鳴り、竹やぶの側道の防空壕へ母に背負われて、逃げたものです。アメリカの飛行機の機銃掃射に竹が当たりバタバタと竹が倒れていた。私はまだ3才。こわいとも恐ろしいとも思わず、母の背におぶさっているのがうれしく、それを見ていた。

今は立派な大人のアメリカ人でもやっぱり戦争は人々を気の狂う獣に

変えてしまう。一般市民が逃げて行く行く人々に機銃掃射をするんです。その証明として世界でただ一つ、原爆を落とされた日本。戦争はだからしてはいけないんだ。簡単な事だと思っんですが…？

中東へ旅してつくづく思う。けものでも、そこまで殺し合いはしない。幼児たちがバクダンで地雷で手足をもぎ取られ、目がない。耳がない。それを見て、あの幼児たちがいったい何をしたんだ!! 思わず泣いてしまった。こんな事が、日本でもあったんだ!! 遠い昔のように思うけれど、私は生きているし、今もトラウマになっている。

35才の頃、子どもをつれて、広島へ。原爆資料館を訪問。子どもたちが学校の授業で習っている最中で、それはそれとしてよい機会だった。子どもに聞いた。「感想は？」 小学6年の男の子は「何で原爆なんて落としたん。20万人以上が一度に死ぬなんて、考えられへんわ!!」。小学4年の女の子は、「お父さん、ざんこくって言葉はこんな時に使うかなあ」 覚えてのざんこくって言葉を初めて使う。黒こげになった弁当箱のごはん。私は、「この子の持って来た弁当には米なんか、なかったんだ!!」 さつまいもかなあ？

何しろ戦争はほとんどの人たちが負けると思っていたが、誰も口には出さなかったらしい。だって皆ま

ずしく、食べ物もあつたら何でも食べたんだ。生きる為に。そんな時代が、中東では今も現実にあるんで
す。皆戦争はいやだ!!と言いますが、実際に経験なしでは、この言葉はむなしく思います。舞鶴港が爆撃
に遭ったあと、軍隊道路の道端の黒い石くれは、焼夷弾にあたった手足バラバラの焼けこげた人間だとあ
とで聞いた時、3才の私の頭の片すみに残っていた残像は今
もむなししいものとなっている。戦争は行動する人も、そうで
ない人もみんな、悲しい事なんですが、みんな狂気になつて
しまうんです。



戦中戦後あれやこれや

東大阪市 東野 清子 82歳

戦争についての古い記憶は、隣のおじさんも、またその隣のおじさんも赤いたすきをして、万歳万歳と言う声に送られて出征していったことです。私は何の光景かと目を見張りました。昭和20年国民学校1年生で、上級生に挟まれて軒伝いに学校に行きましたが、ウーウーウーというサイレンが鳴るとすぐ引き返して、家の防空壕へ飛び込むという毎日でした。空襲警報が鳴ると家に電灯をつけてはいけないし、また白い服を着てもいけなかった。常に防空壕へ入っていました。8月15日の終戦までは勉強はほとんどできません。毎日のように西の空が真っ赤に燃え、真っ黒な煙と火柱が立つという悲惨な状態です（大阪城南の方）。子どもは芋のつたやたんぼぼや嫁菜やせり採り、エビガニやいなご取り、草取りなど、そして母親の手伝いをしました。毎日の食事は蒸し芋、カボチャの塩蒸し、ジャガイモ煮雑炊、メリケン粉ダンゴ汁、どれもおいしかったです。兵隊さんが布団がないので、小さい手で刈り取った草を干して、体全体で

抱えて学校へ持って行くと、あめ3個と交換してくれました。おいしいあめ玉でした。兵隊さんに役立つ草をもっと刈ろうと思いました。足元の草履はわらで、一生懸命自分で何足も作りました。これは先生が教えてくれました。毎日の食事はひもじい思いで過ごしました。空を見上げると飛行機雲が十文字に青い空に白く走り、敵の飛行機が点々と並んでいました。今日では青い空に白い飛行機雲はとてもマッチしてきれいですね。終戦後は子どもなりに忙しく、1個のパンを買うのも100mも並んで買い、寺のイチヨウの木になるぎんなんの実も子どもたちで朝5時頃から拾いました。ぎんなんのくさいにおいは手から消えません。戦争のためいろいろな悲惨なことがありました。が、平和に送りたいものです。



私の戦争体験

兵庫県 神戸市 藤田 喜代子 92歳

戦後75年近くになり、あの悲惨な戦争の体験を書きとどめておかねばと
思う年齢になりました。

私も当時は女学校の3年生でした。勤労学徒として、航空機工場に動
員されました。日の丸鉢巻にモンペ姿で、ただひたすら必勝という信念
で勤めました。それが思いもしない敗戦という悲惨な結果になり、悲しみ
いっぱいでした。今この年まで生かされた私は、どのようなことがあつ
ても戦争だけは避けなければと、その思いが、あの悲惨な時代に逆戻りい
たしました。

私の動員先は明石の航空機工場でした。配属先は利材係といって、材
料を集めてきて再利用をするための選別をするのが私たちの仕事でした。
この時私はひそかに何となく一抹の不安を覚えました。昼間は工場に、帰
宅後は時々あちこちで鳴るラジオの警報におびえ、疲労は大変でした。

昭和20年1月19日明石に空襲がありました。その日、私はツベルクリ

ン注射の跡の化膿がひどかったので、工場の診療所に行っていました。診療所は混んでいました。その日は急患があり、盲腸の手術を先にするからとのことでした。その時、けたたましく警報のサイレンが鳴りだしました。私はすぐ診療所を後にしました。学校ごとに集合、避難するからです。しかし工場の外に出ると、早空襲のサイレン、はるか向こうにB-29の爆音が迫っていました。私たちはどのように逃れて防空壕に入ったのか、今考えてもわかりません。後ほど知ったのですが、診療所で手術中の医師や受けていた若い少年は爆死されたそうです。その後、私の親友が、お母さまが鹿児島に疎開されたので会いに生き、帰ってきた翌日、登校先の職場で空襲で亡くなってしまいました。親友として短いお付き合いになりました。とても悲しみいっぱいでした。

その後も私の叔母の子ども4人の爆死、我が家も全焼。けれども家族は8人全員が生き残り、今は感謝しかありません。

戦争だけではどのようなことがあってもやめるべきだと思いません。平和な今が続くことが私の最大の願いです。

ひな人形、さつまいも、イナゴ

堺市 松井 三千代 84歳

ガラス張りのコンパクトなひな人形は、3月15日の大阪大空襲で焼けてしまった。

私の元で数日楽しんだが、荷物になっては…と、父母の元へ送り返した直後でした。淋しくなった私の心にたった一つ手元に残したオモチヤのソファーで、慰めを得ていたのです。

田舎に親類のない私は父母が「学童疎開」を決め、和歌山に行くことになりました。小学3年生は最低年令ですが、何故か遠足に行くような楽しい気持ちでした。宿泊地は海南市黒江町浄国寺です。新しいきれいなお寺でした。夜は広い本堂でみんな一緒に寝るのです。トイレが外にあるので、友だちと待ち合わせて往復するのが怖い思いもして大変でした。

夏は暑いので友人3人と近くの民家に宿泊、朝のサイレンでお寺へもどります。「寮母さん」が一緒だったので、お母さんのように慕いました。わからない事は何でもおたずねして…。

月に一度、面会日が設けてあります。学校からみんな一緒に「あんない」を出すのです。必ずきてくれます。オヤツをもって…。(さつまいも)

近くにおられる父の友人がさつまいもをたくさん持ってきてくださるのです。おいしかった!!いつの間にかまわりに友だちが集まって、さつまいもはまたたく間になくなります。

父母の往復は大変でした。B-29が低空飛行をするので父母はパイロットの顔まで見えたそうです。(ああこわい…)そんな話をして、毎月往復してくれました。しかし、和歌山も危なくなり四国へ二次疎開することになりました。

終戦を迎え私たちはバラバラになり、私は父に連れられて父の社宅のある貝塚の地に帰ってきました。畑が広く、私はあぜ道で焼いたイナゴをたくさんたべました。

別れた友とはその後どうなったかわからず、そのため同学年の友は少ないのです。

戦争は絶対にダメ!!

こんな淋しさが終生続くのですから。

地の平和を願って私の戦争体験といたします。

戦争学に学ぶ

羽曳野市 宮崎美智子 82歳

北海道網走郡津別村字新町、国有地内公舎にて鉄道員だった。父、母と兄弟、末子の私7人、父の退職後、父の故郷へ帰り、青森県三戸へ、私の学校のことで大坂の此花区へ、高見町へ、そこで終戦を迎え、「ラジオ」の「玉音放送」で日本が降伏すると!! 両親が涙ぐんで：私は国民小学校2年生で訳もわからず、トラックで死体を運んで、街は焼け野原、我が家も危険で、リュックひとつ持ち出し、佐賀県伊万里へ。小中学校を伊万里でくらし、中学校を卒業後、福岡へ：北から南まで一周して両親は育ててくれました。

「戦争」の原因とは？

富と名誉、恐怖、と分析しております。

というのは、人間の一番大きな欲望は、富と名誉を追求し、恐怖から

解放されることで国にとっても同じ、というわけです。

「元内閣官房副長官補（安全保障・危機管理担当）」を務めた柳澤協二先生の巻頭特集39集の一筆です。

大化から数えて247番目の元号、5月には新しい元号へ。

今、国中では宗教や政治の乱：家庭内での殺意：命の尊さを：私は生命をいただき80年、いろいろなことがあり、一番つらいのは48歳の時、大病にかかり、1年の命と言われて、子育ての中、育てられな
いのかも、でも命が今年で32年間、助かって、子どもたちもそれぞれ遠くにはいますが、口も出すこ
とも遠くより見守り生きていきます。

（*平成31年にご寄稿いただきました。）

